

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 庭園部会(第 40 回)

日時：令和 7 年 4 月 10 日（木）13:30～15:30

場所：西の丸会議室

次 第

1 開会

2 あいさつ

3 議事 • 二之丸庭園の修復整備について <資料 1 >

4 報告 • 二之丸庭園第 1・2 次発掘調査成果について <資料 2 >

5 閉会

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 庭園部会(第40回)出席者名簿

日時：令和7年4月10日（木）13:30～15:30

場所：西の丸会議室

(敬称略)

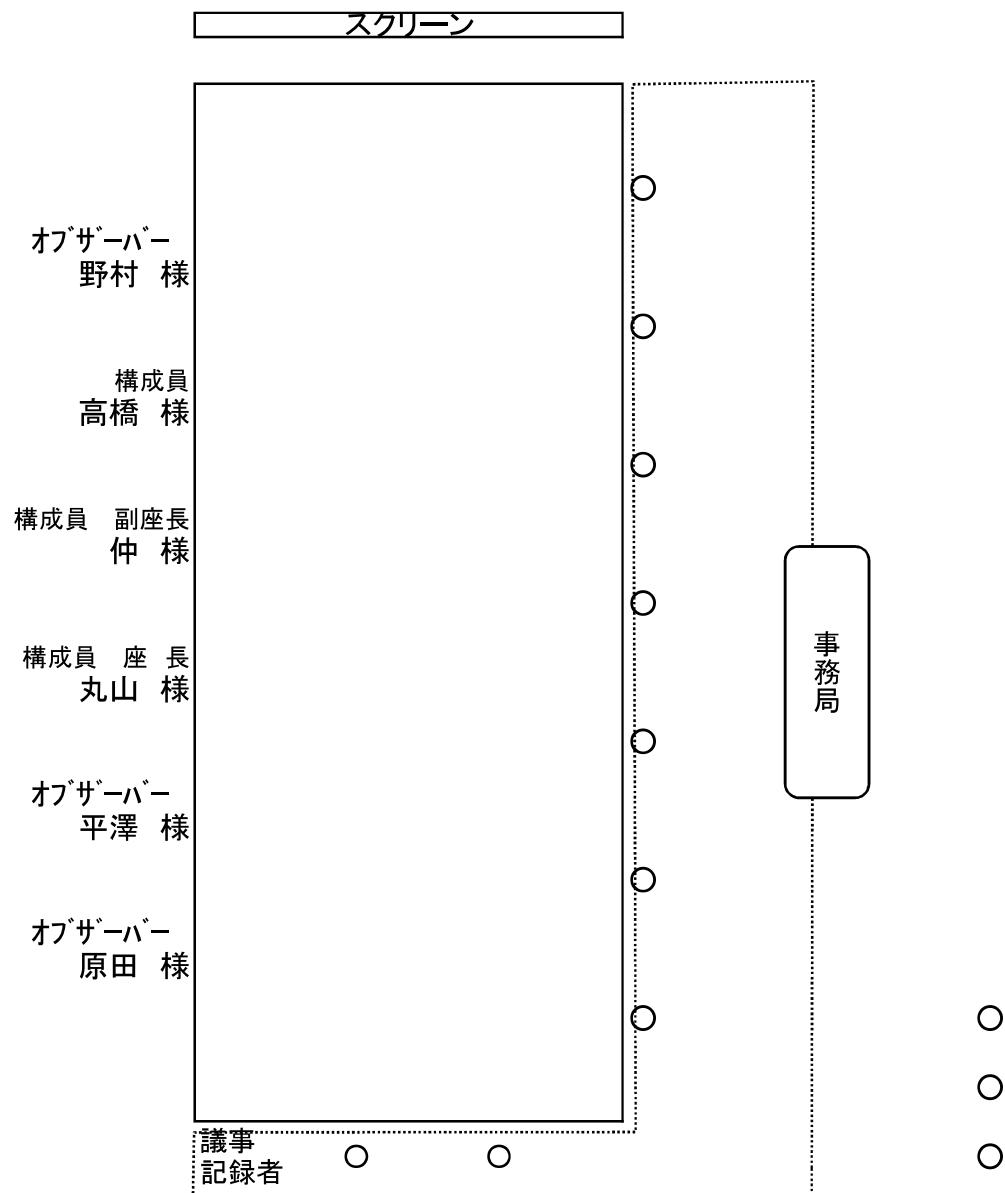
■構成員

氏名	所属	備考
丸山 宏	名城大学名誉教授	座長
仲 隆裕	京都芸術大学教授	副座長
高橋 知奈津	奈良文化財研究所文化遺産部 遺跡研究室 室長	

■オブザーバー

氏名	所属	備考
野村 勘治	有限会社野村庭園研究所	
平澤 豪	文化庁文化財第二課主任文化財調査官	
原田 早季子	愛知県県民文化局文化部 文化芸術課文化財室 技師	

庭園部会 第40回 座席表



二之丸庭園の修復整備について

1 余芳周辺の整備

余芳周辺整備にあたり、枝折戸、袖垣、燈籠、標柱、州浜、雨落ちについて検討した。整備計画書の基本方針にあるとおり、北御庭については『御城御庭絵図』に描かれた空間性を回復することを基本とする。また、整備計画書の「第2章計画地の概要 第2節沿革と史料 第2項参考史料の概要」にあるとおり、同時代に描かれた『尾二ノ丸御庭之図』は、『御城御庭絵図』と異なる箇所が見られるため、2つの絵図を比較検証することで考察を深める。また余芳と思われる第14代藩主慶勝によって撮影された古写真についても史料として取り扱う。

(1) 古絵図

- ア 御城御庭絵図／作成年代：文政年間（名古屋市蓬左文庫所蔵）（図1-1）
第10代藩主斉朝により改修された二之丸庭園を詳細に描いた絵図で、文政年間に作成されたと考えられる。
- イ 尾二ノ丸御庭之図／作成年代：文政以降（徳川美術館所蔵）（図1-2）
文政期の庭園を描いた詳細な絵図であり、二度の大きな修正が認められる。

(2) 古写真

- ア 第14代藩主慶勝によって撮影された写真。余芳に関する写真は1枚確認されている。
(徳川林政史研究所所蔵)（写真1-1）

写真1-1 二之丸御庭の御茶屋
(徳川林政史研究所所蔵)



図1-1 『御城御庭絵図』
(名古屋市蓬左文庫所蔵)

図1-2 『尾二ノ丸御庭之図』
(徳川美術館所蔵)

2. 構造物

(1) 枝折戸

ア 絵図の比較検証

『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』を比較した枝折戸の検証結果は、下表のとおりである。支柱は概ね同様な描き方をされているが、戸は『御城御庭絵図』には描かれているが『尾二ノ丸御庭之図』には描かれていないものもある。

園路には、余芳周辺に3種類の異なる意匠の枝折戸を設置している。二之丸庭園内で御植木屋の枝折戸だけは、扉が1枚の片開きで他は両開きである。霜傑と権現山下御席の枝折戸には門柱だけではなく頭つなぎの横架材がつく。張出外御席の枝折戸は、接続する板塀と同等の高さがある。植木屋と霜傑の枝折戸は、戸についてのみ緑色である。枝折戸の支柱は、飛石と飛石の間に位置するように描かれている。

表 2-1 枝折戸における『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』との比較検証結果

事項	御城御庭絵図	尾二ノ丸御庭之図
枝折戸	① 支柱は2本、戸は両開の閉じた状態で、意匠は均一な線の太さで斜め格子に描かれる	① 支柱は2本描かれるが戸は描かれない
	② 支柱は2本、戸は両開の閉じた状態で、意匠は異なる線の太さで縦格子と斜め格子に描かれる	② 支柱は2本描かれるが戸は描かれない
	③ 支柱は2本、戸は両開の閉じた状態で、意匠は異なる線の太さで縦格子と斜め格子、円に描かれる	③ 支柱は2本、戸は南側に開いた状態で、意匠は面状に描かれる
乗越石	乗越石は支柱間を跨がない表現	乗越石 乗越石は支柱間を跨がない表現

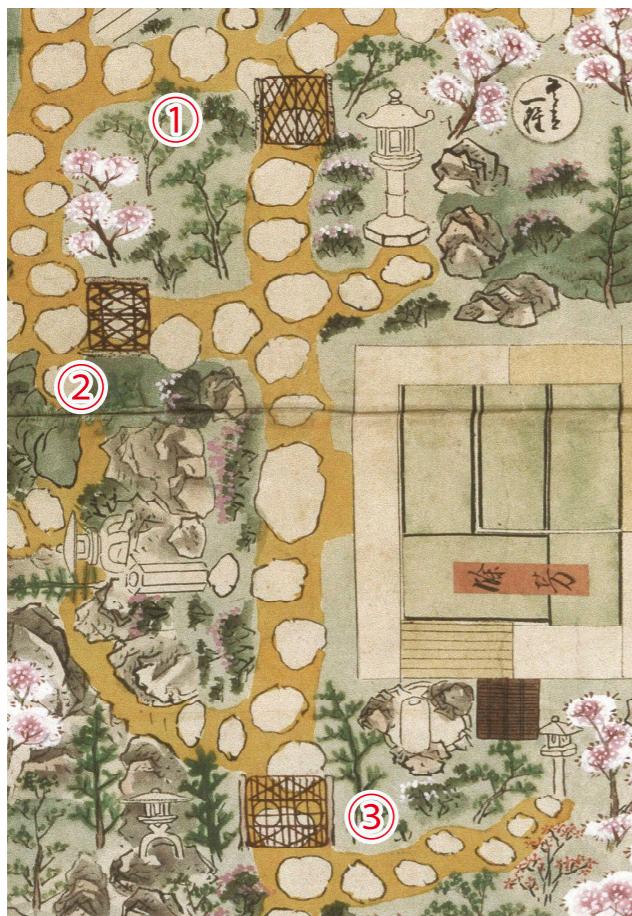


図 2-1 枝折戸『御城御庭絵図』部分
(名古屋市蓬左文庫所蔵)



図 2-2 枝折戸『尾二ノ丸御庭之図』部分
(徳川美術館所蔵)

枝折戸と竹扉・竹垣の線の描き方について、竹扉や竹垣の線は、立子が2本線で平行に直線で描かれている一方で、枝折戸の線は、1本の太い線でゆがみ、かすれ、ばらつきが表現され、構造の違いが見て取れる。

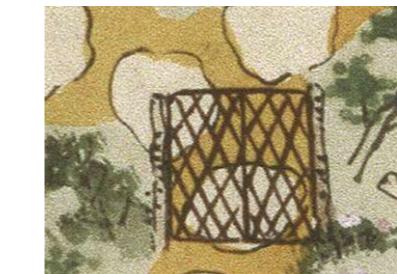


図 2-3 枝折戸(余芳・北)

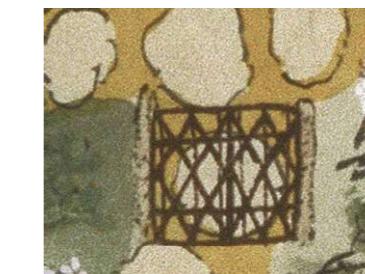


図 2-4 枝折戸(余芳・西)

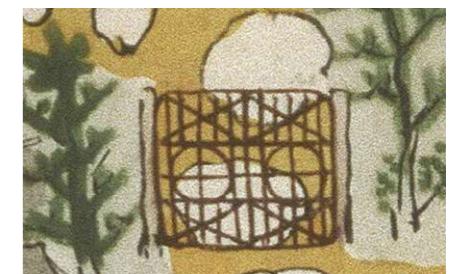


図 2-5 枝折戸(余芳・南)

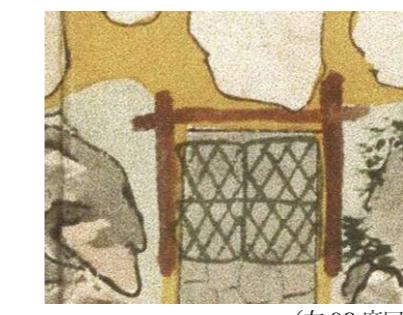


図 2-6 枝折戸(霜傑)



図 2-7 枝折戸(植木屋)

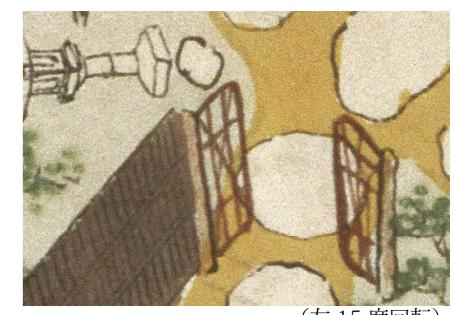


図 2-8 枝折戸(張出外御席)



図 2-9 穂垣と枝折戸(権現山下御席)

図 2-3～9 枝折戸『御城御庭絵図』部分(名古屋市蓬左文庫所蔵)

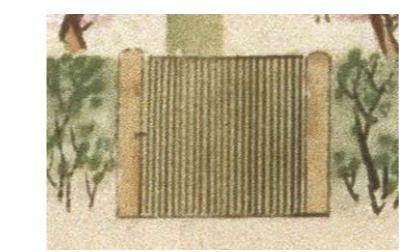


図 2-10 竹扉(御稽古場)



図 2-11 竹垣(御二階北)

イ 枝折戸の構造検討

(ア) 前回部会等までの検討済事項

- 意匠については、戸面と支柱が描かれている『御城御庭絵図』を参考とし、支柱位置について

は、併せて『尾二ノ丸御庭之図』も参考とし、検討する。

- 材料について根拠がないため、柱は、耐久性と調達の可能性を考慮し、檜材を使用する。

- 絵図より、戸面位置は飛石と飛石の間に配置する。

(イ) 今回検討事項

- 絵図より、戸は両開きと想定されることから、支柱間距離は120cmと設定する。また、戸に手をかける動作性より、高さは70cm以上と設定する。

- 柱は檜焼杭 $\phi 60mm$ とする。

- 竹材は、構造材としてマダケの丸竹を、編み付け材としてマダケの割竹を使用する。

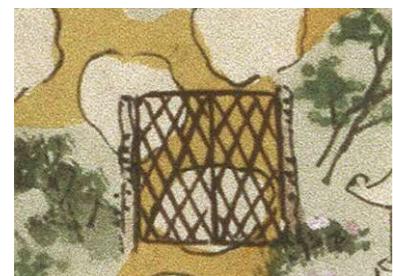


図 2-12 枝折戸（余芳・北）

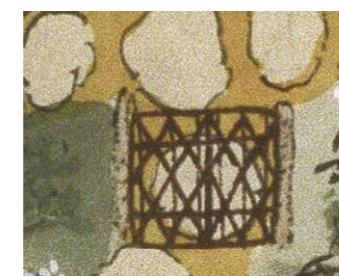


図 2-13 枝折戸（余芳・西） (右 90 度回転)



図 2-14 枝折戸（余芳・南）

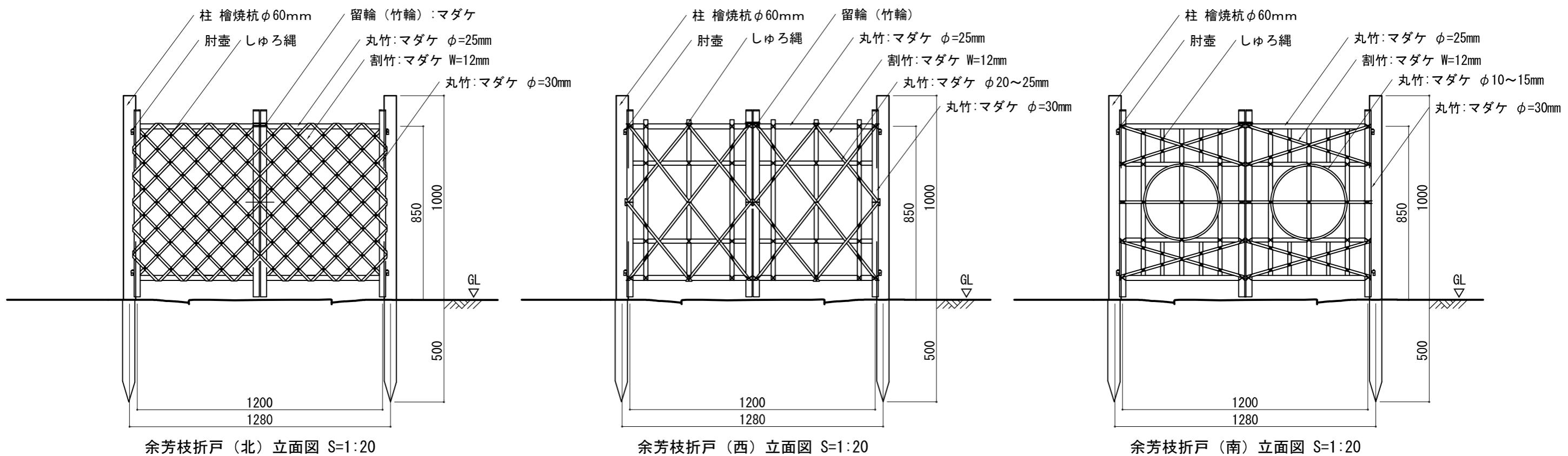
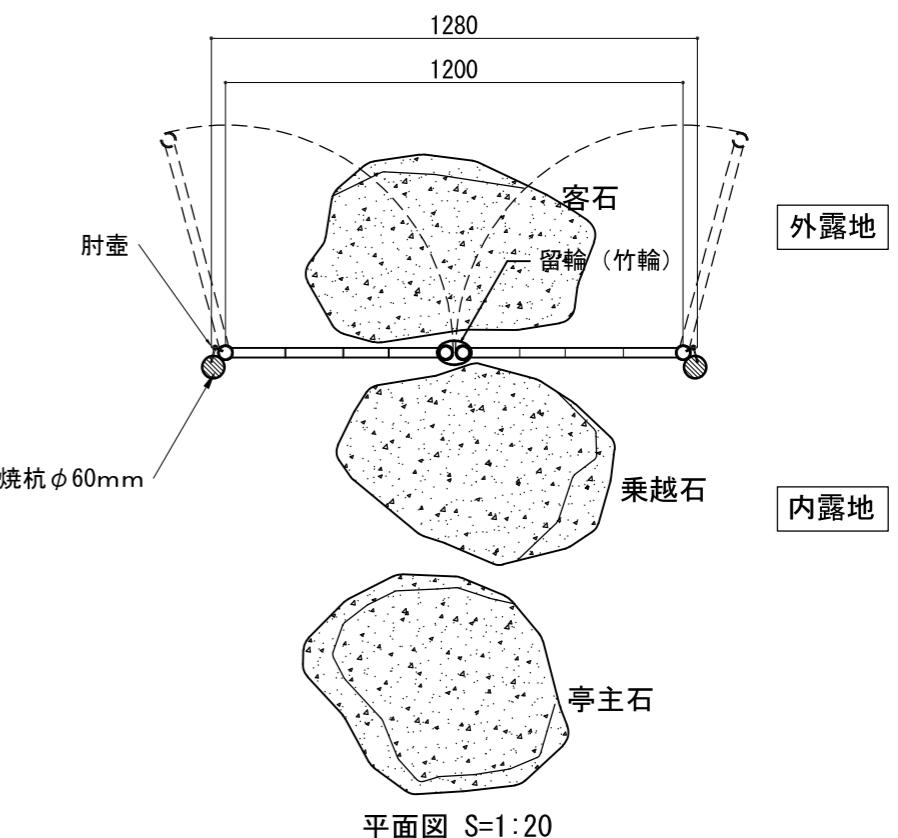


図 2-15 枝折戸構造検討図

(2) 袖垣

ア 絵図の検証

『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』を比較し、袖垣の検証結果を下表にまとめると、概ね同様の形で設置箇所も同様な描き方をされている。

表 2-2 袖垣における『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』との比較検証結果

事項		御城御庭絵図	尾二ノ丸御庭之図
袖垣	意匠	① 立子が隙間なく立てられ、押縁が3本水平方向に描かれる。玉縁は描かれていないものの、立子の天端が揃って描かれる。 ② 立子が隙間なく立てられ、押縁が2本水平方向に描かれる。玉縁は描かれていないものの、立子の天端が揃って描かれる。	① 立子が隙間なく立てられ、押縁が2本水平方向に描かれる。玉縁は描かれていないものの、立子の天端が揃って描かれる。 ② 立子が隙間なく立てられ、押縁が2本水平方向に描かれる。玉縁は描かれていないものの、立子の天端が揃って描かれる。
	寸法	① 縦と横は同様な長さで描かれる。 ② 縦より横が長く描かれる。	① 縦より横が長く描かれる。 ② 縦より横が長く描かれる。
	配置	① 建物に対して垂直に配されている。 ② 建物に対して斜めに配されている。	① 同左 ② 同左

図 2-16 袖垣『御城御庭絵図』部分
(名古屋市蓬左文庫所蔵)図 2-17 袖垣『尾二ノ丸御庭之図』部分
(徳川美術館所蔵)

イ 絵図における袖垣の材料検証

御城御庭絵図に描かれた袖垣のうち特徴のあるものとして、円窓が設けられた霜傑の袖垣や、上部が四つ目状に組まれた植木屋の袖垣がある。これらの袖垣と余芳の袖垣を材料と垣面の構成及び押縁、玉縁の有無について比較検証し、考えられる事例を抽出する。

(ア) 材料

袖垣の材料としては、竹の幹、竹の枝（竹穂）、樹木の皮（柴）に大別される。余芳の袖垣（図 2-18）の材料は、多春園（図 2-19）や霜傑（図 2-20）と同様、線の太さが均一で平行に幅広で描かれている。一方、霜傑（図 2-24）や梅之御間（図 2-25）の袖垣は、線の太さにばらつきがあり、端部が細く描かれている。これらの異なる表現より、前者は竹幹、後者は竹穂や柴を用いていると考えられる。以下に竹幹を用いる垣を例示する。

- ・幹を用いるもの：建仁寺垣、木賊垣、鉄砲垣、御簾垣、松明垣、編垣、ひしぎ垣 等

立子と押縁が描かれている袖垣及び竹垣の色について検証した結果、袖垣は全て濃く描かれているが、竹垣の中には、御二階北（図 2-26）や植木屋（図 2-27）のように、色が淡く描かれているものもある。竹の種類及び加工方法については、『百垣之図』等を参考に選定する。

(イ) 壁面の構成

垣面は、竹を垂直に立て、立子として構成されている。また、立子の天端は揃って描かれている。以下に例を示す。

- ・竹を垂直に立て、いわゆる立子として垣面を構成するもの
：建仁寺垣（真、行）、木賊垣、清水垣、鉄砲垣 等
- ・束ねた竹穂を立子として垣面を構成するもの：松明垣、鉄砲垣

(ウ) 押縁、玉縁

押縁は3段描かれているが、玉縁は描かれていない。以下に例を示す。

- ・押縁があり、玉縁がないもの：建仁寺垣（行）、清水垣、鉄砲垣、松明垣 等

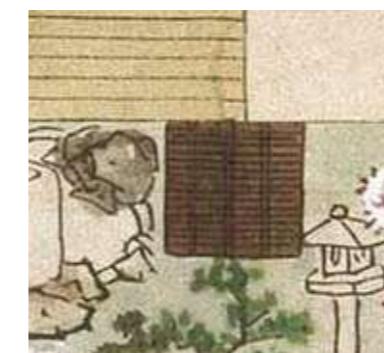


図 2-18 袖垣（余芳）



図 2-19 袖垣（多春園）



図 2-20 袖垣（霜傑）



図 2-21 袖垣（植木屋）



図 2-22 袖垣（風信）

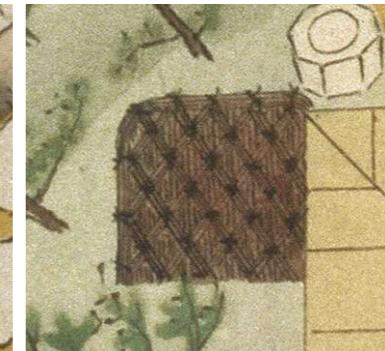


図 2-23 袖垣（多春園）

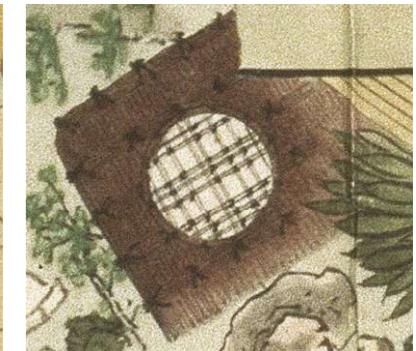


図 2-24 袖垣（霜傑）

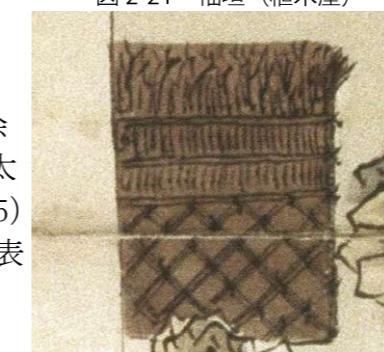


図 2-25 袖垣（梅之御間）

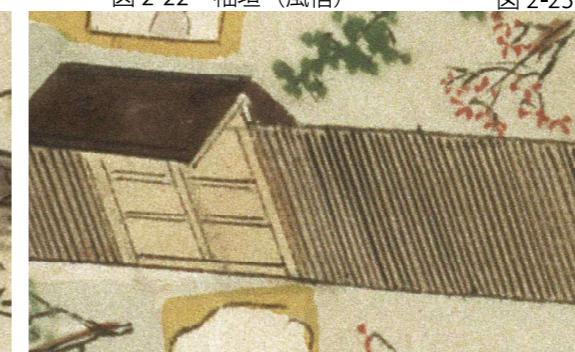


図 2-26 竹垣（御二階北）



図 2-27 竹垣（植木屋）

図 2-18～27 袖垣『御城御庭絵図』部分（名古屋市蓬左文庫所蔵）

ウ 古写真の検証

余芳南側の袖垣について、古写真では認められない。

エ 袖垣の構造及び配置検討

現地にて模型（H1800×W1800）を設置し、検討した結果、下記の設計条件にて構造及び配置検討を行う。

(ア) 袖垣（南側）（写真2-2～3）

- ・幅はW=1200mm、1800mmの2案について検討を行う。（写真はW1800）
- ・絵図より図2-43のA点を起点に南北方向に配置する。

(イ) 袖垣（東側）（写真2-4～6）

- ・幅は1800mmについて検討を行う。（写真はW1800）
- ・絵図より図2-43のB点を起点に東西方向に配置する。
角度は0度、南に30度～45度で検討する。

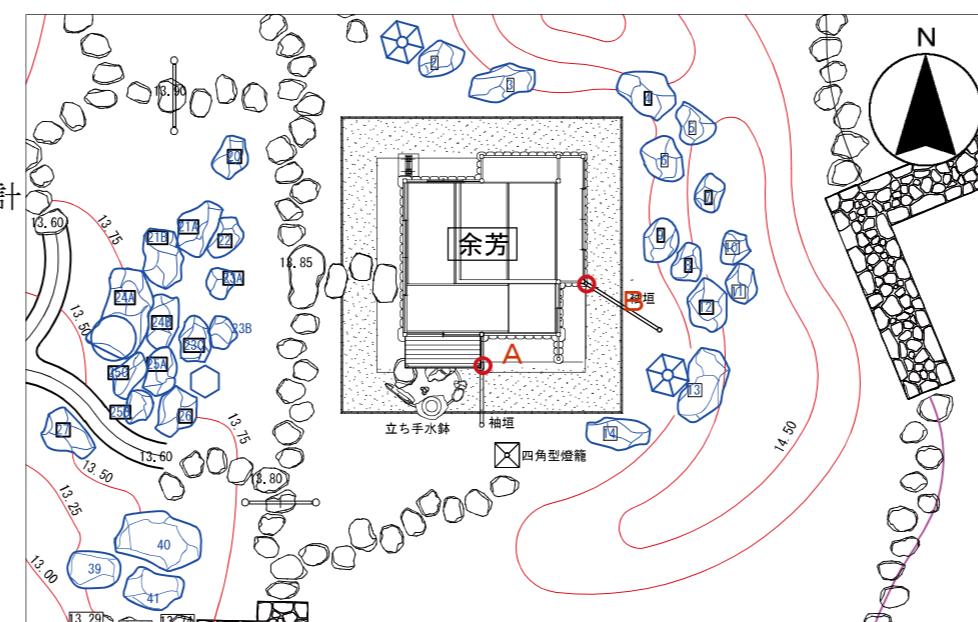


図 2-28 袖垣配置平面図 S = 1 : 150

写真2-2 袖垣（南側）実寸模型設置状況
(南側より)写真2-3 袖垣（南側）実寸模型設置状況
(東側より)写真2-4 袖垣（東側）実寸模型設置状況（角度0度）
(南側より)写真2-5 袖垣（東側）実寸模型設置状況（角度0度）
(南東側より)写真2-6 袖垣（東側）実寸模型設置状況（角度45度）
(南東側より)写真 2-1 二之丸御庭の御茶屋
(徳川林政史研究所所蔵)

才 袖垣の構造検討

(ア) 前回部会等までの検討済事項

- ・袖垣は、竹幹を立子として垣面を構成し、押縁があり玉縁がない建仁寺垣（行）で、構造を検討する。
 - ・配置について、東側は、余芳の中央の柱から南東方向に、南側は、余芳の中央の柱から南方向に配置する。
 - ・親柱は檜鏽丸太 ϕ 120内外とし、押縁は半割竹W60内外、立子は割竹W40内外の両面張りとする。また、腐食防止のため立子は差し石の上に設置する。

(イ) 今回検討事項

- ・袖垣の構造について、南側はH1,200×W1,200、東側は、H1,800×W1,800とする。

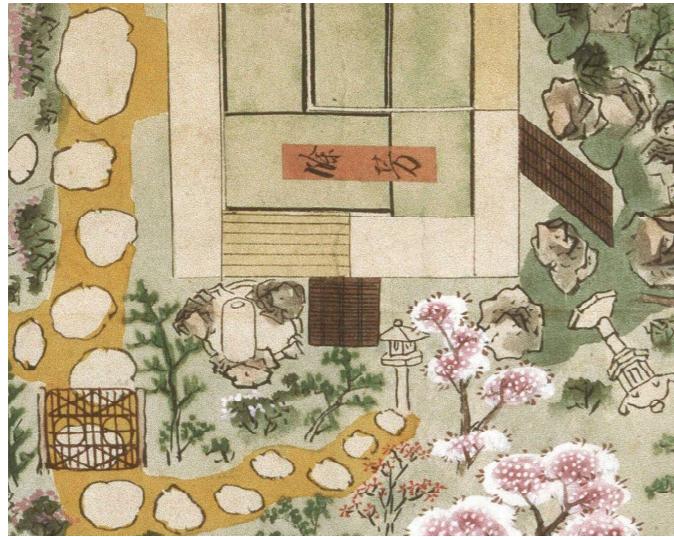


図 2-30 袖垣『御城御庭絵図』部分
(名古屋市蓬左文庫所蔵)

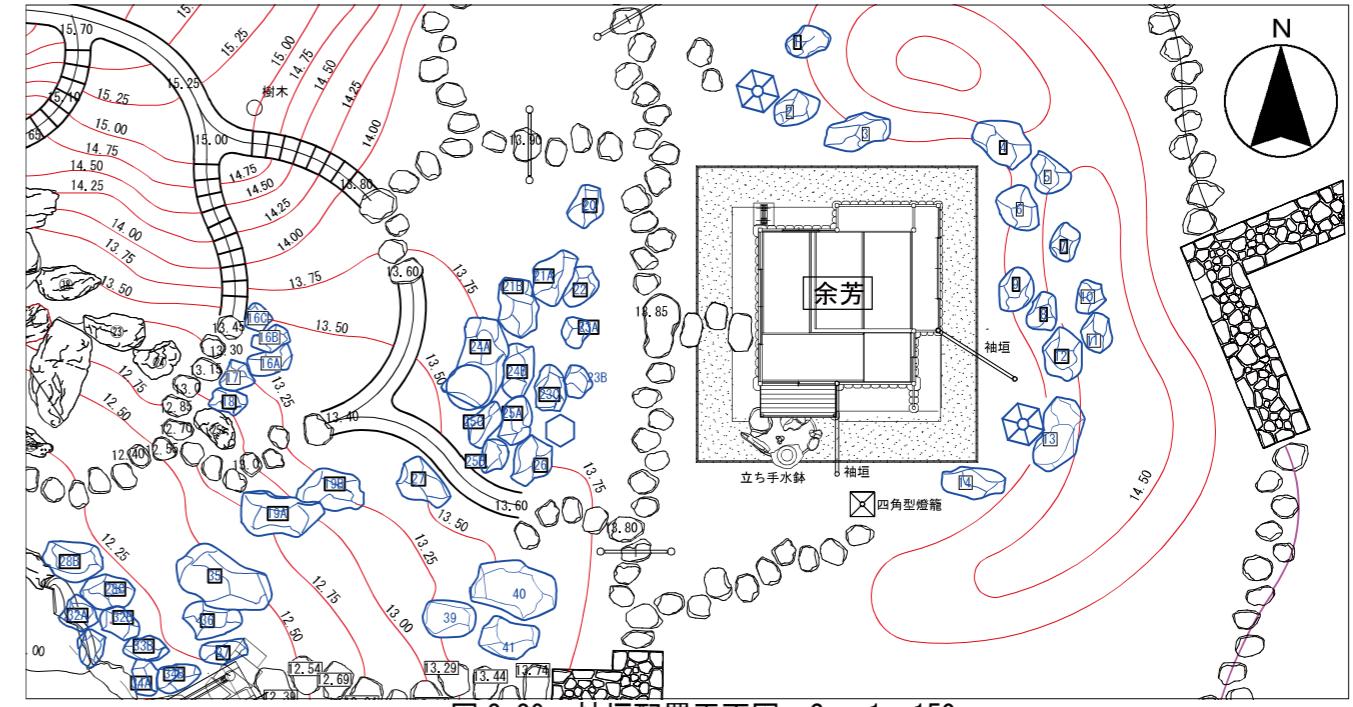
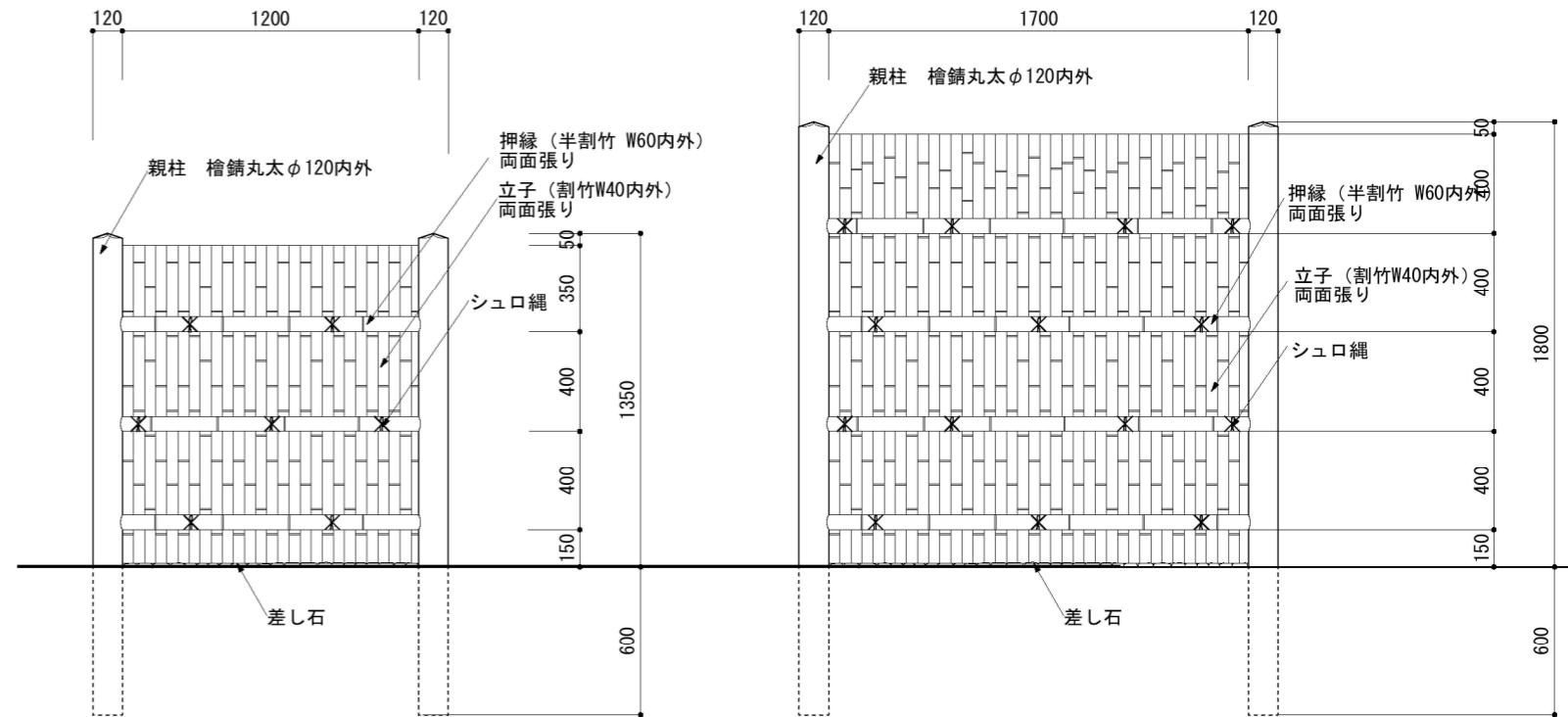


図 2-29 袖垣配置平面図 S = 1 : 150



平面図 S = 1 : 30



断面図 S = 1 : 30

〈余芳東側〉

図 2-31 袖垣 『尾二ノ丸御庭之図』
部分（徳川美術館所蔵）

写真 2-7 二之丸御庭の御茶屋
(徳川林政史研究所所蔵)

力 雪見燈籠-2

- ・雪見燈籠-2は、製作品とする。
- ・絵図より、雪見燈籠-2の大きさは、雪見燈籠-1よりも小さいこと、市場性とを考慮し高さ H=900mm、幅 W=900mm とする。
- ・脚の本数及び形状は絵図の比較検証結果より、4本一体型とする。
- ・石材について、国産花崗岩で製作する。表面はノミ切ビシャン仕上げとする。

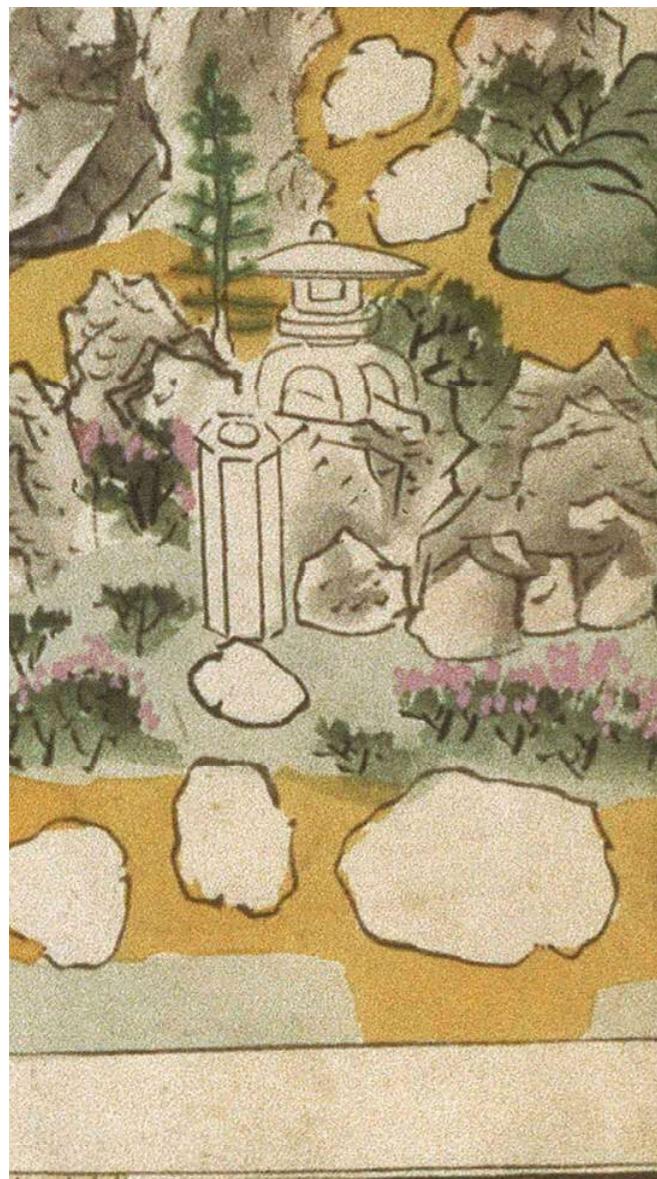


図 2-33 雪見燈籠-2『御城御庭絵図』部分
(右 90° 回転)
(名古屋市蓬左文庫所蔵)

図 2-34 雪見燈籠-2『尾二ノ丸御庭之図』
部分 (右 90° 回転)
(徳川美術館所蔵)

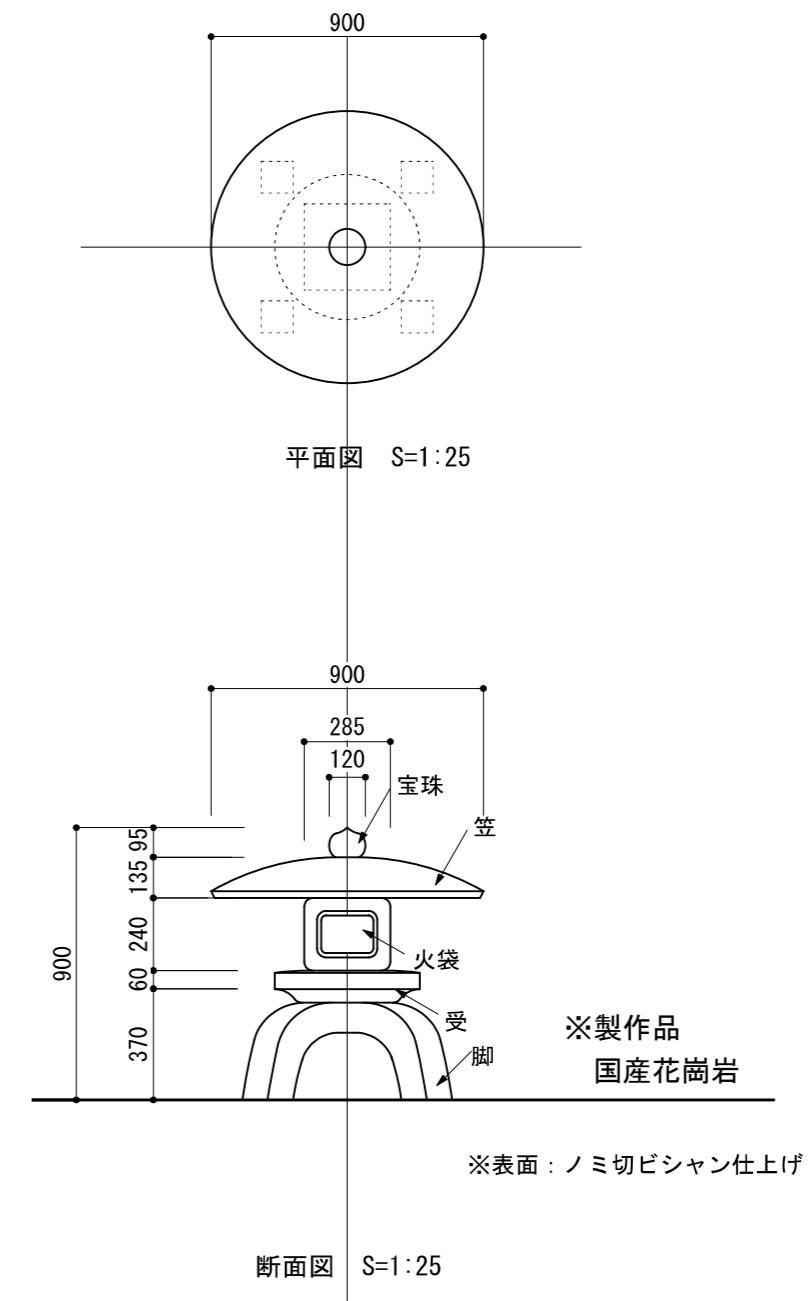


図 2-35 雪見燈籠-2 構造検討図 (脚 4 本)

辛 四角型燈籠

- ・余芳周囲のGLは13.80である。また、余芳の手水鉢の天端はGLから1058mmの高さとなる。
 - ・古写真において、立ち手水鉢の天端高と四角型燈籠の笠の軒高は同様であることから、四角型燈籠の笠軒高は GL から約 1.1 m と推定し、構造検討する。
 - ・竿は ϕ 210mm、地上部H800mm程度とし、施工時に根入れ深さを調整する。
 - ・庭園部会にて、現地で実寸大模型をGLよりH=1200mm、1380mmの2案設置し（写真2-8～9）検討し、結果として大きさやバランスを考慮し、H=1380mmとした。（図2-16）

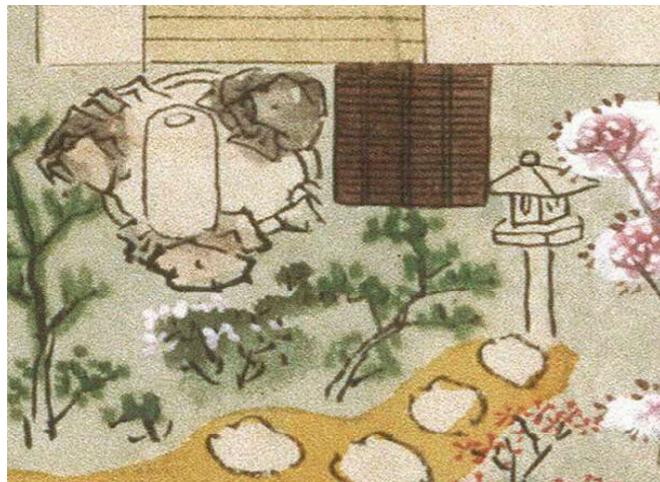


図 2-36 四角型燈籠『御城御庭絵図』部分
(名古屋市蓬左文庫所蔵)



写真2-11 実寸模型設置状況
(H=1380mm)



写真2-10 実寸模型設置状況 (H=1200mm)

写真2-9 二之丸御庭の御茶屋
(徳川林政史研究所所蔵)

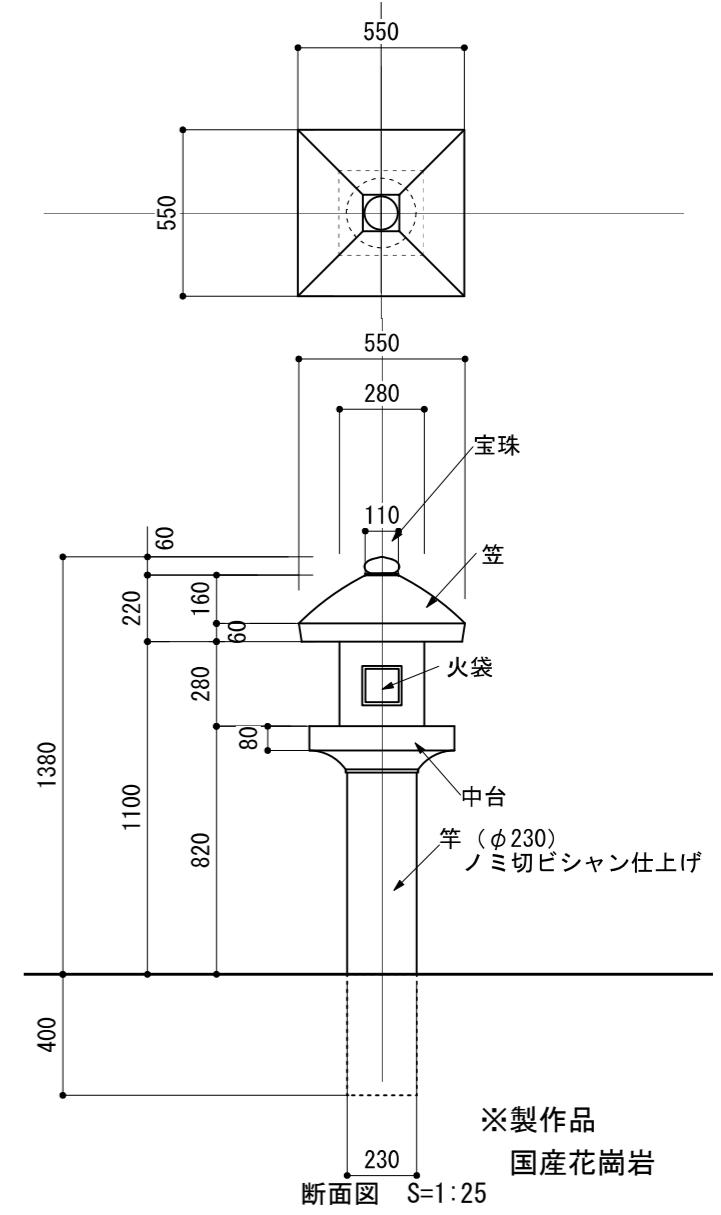


図 2-38 四角型燈籠構造検討図 (H=1380mm)

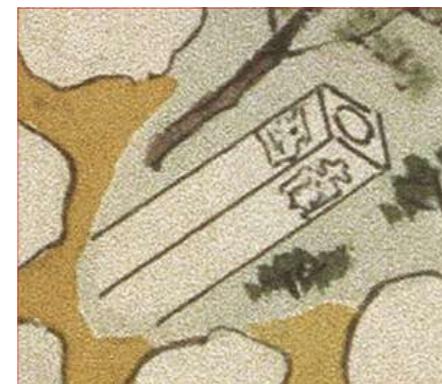
ク 標柱

(ア) 前回委員会等までの検討済事項

- ・標柱は、製作品を設置する。
- ・正四角柱で上面の掘り込みは円形とし、寸法は W240 × D240 × H1200 程度とする。
(根入れは施工時に調整する。)
- ・寸法はW270×D270×H1200とする。表面はノミ切りビシャン仕上げとし、各面1分5厘程度のムクリ仕上げとする。
- ・水鉢の掘り込みは、 $\phi 180 \times H130$ とし、縁は45mmとする。
- ・側面の文字（東西南北）の彫り込みは薬研彫りとする。
- ・根入れは総深さ600mmとし、施工時に高さを微調整する。GLから深さ300mmまで加工し、さらに300mmは荒石とする。

(イ) 今回検討事項

- ・標柱の側面に掘り込む文字の字体について、絵図では、掘り込みの外形線が描かれており、楷書の「南」と「西」が明確に読み取れる。
くずし字用例辞典（児玉幸多編）に記載されている近世のくずし字と絵図に描かれている文字を比較すると、絵図に描かれている文字はくずし字でないことがわかる。
- 図2-39, 40の赤線部は近世の「西」と「南」の文字を示す。



近世の「西」の用例

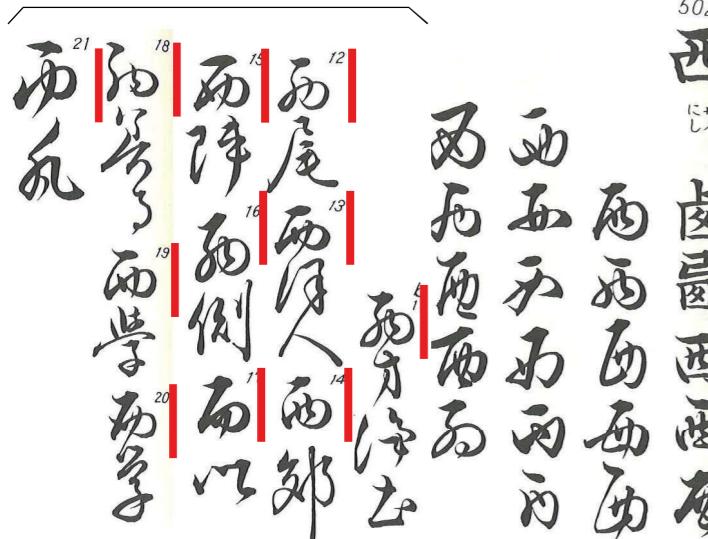


図 2-41 「西」

(くずし字用例辞典 / 児玉幸多編)

近世の「南」の用例

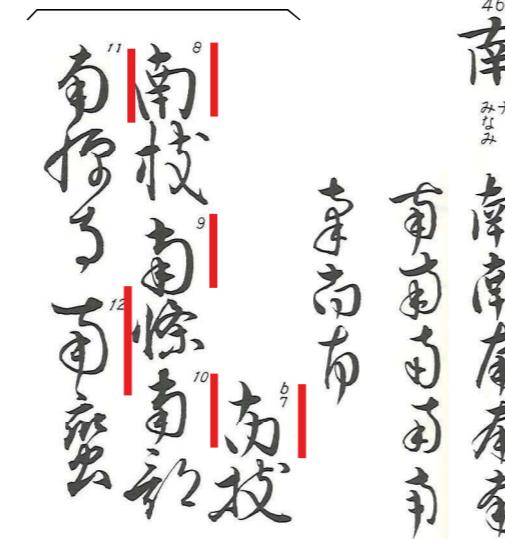


図 2-42 「南」

(くずし字用例辞典 / 児玉幸多編)



図 2-39 標柱『御城御庭絵図』部分

(名古屋市蓬左文庫所蔵)

図 2-40 (徳川美術館所蔵)

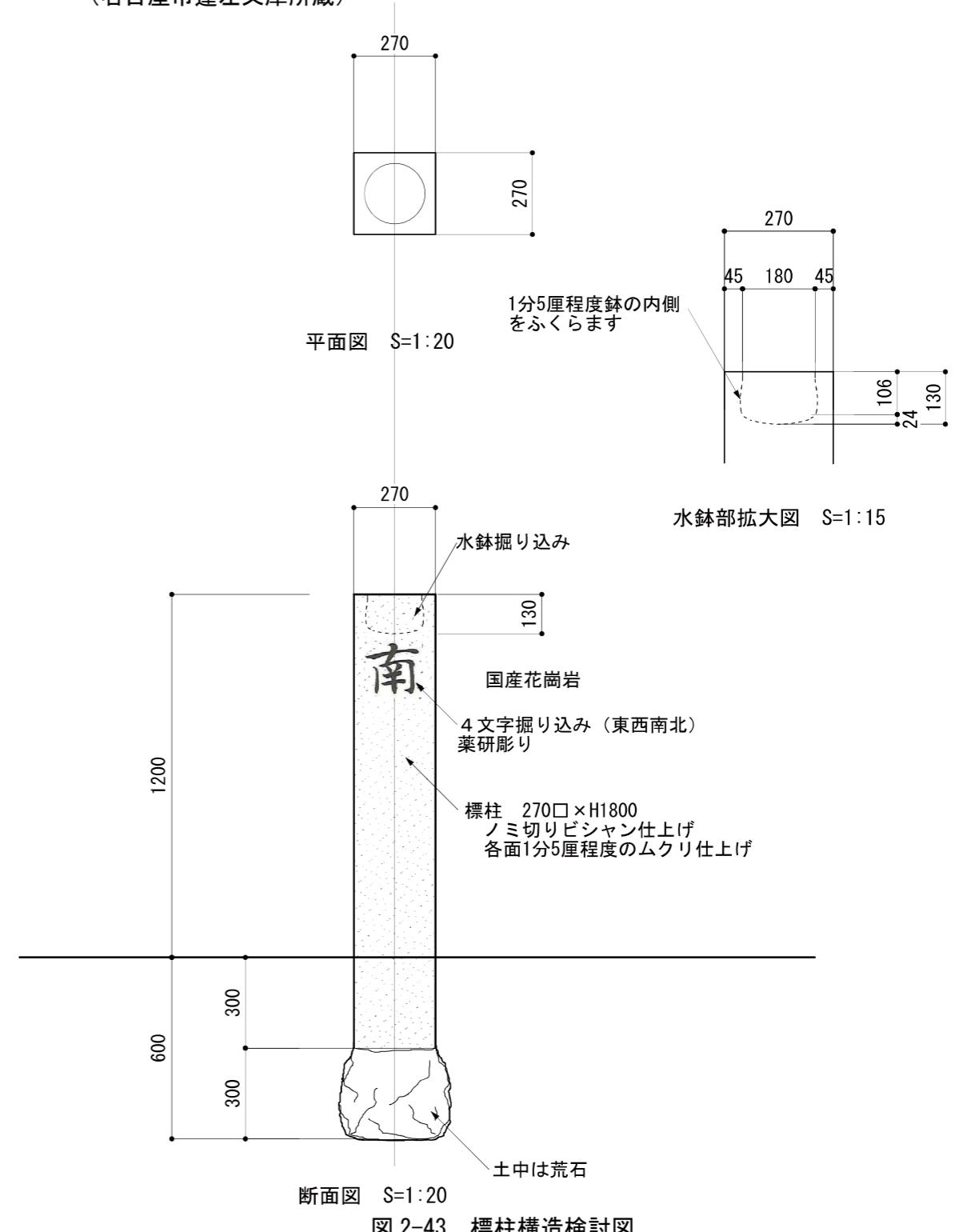


図 2-43 標柱構造検討図

3 州浜

(1) 絵図の比較検証

『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』を比較し、州浜の検証結果を下表のようにまとめた。
その結果、表現方法に違いがあることがわかった。

表 3-1 州浜における『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』との比較検証結果

事項	御城御庭絵図		尾二ノ丸御庭之図	
州浜	①②	単色で着色の表現	①②	黒線での境界や複数色、もしくは濃淡で着色の表現
	③	飛石や石組を表現	③	同左



図 3-1 州浜 『御城御庭絵図』部分（名古屋市蓬左文庫所蔵）

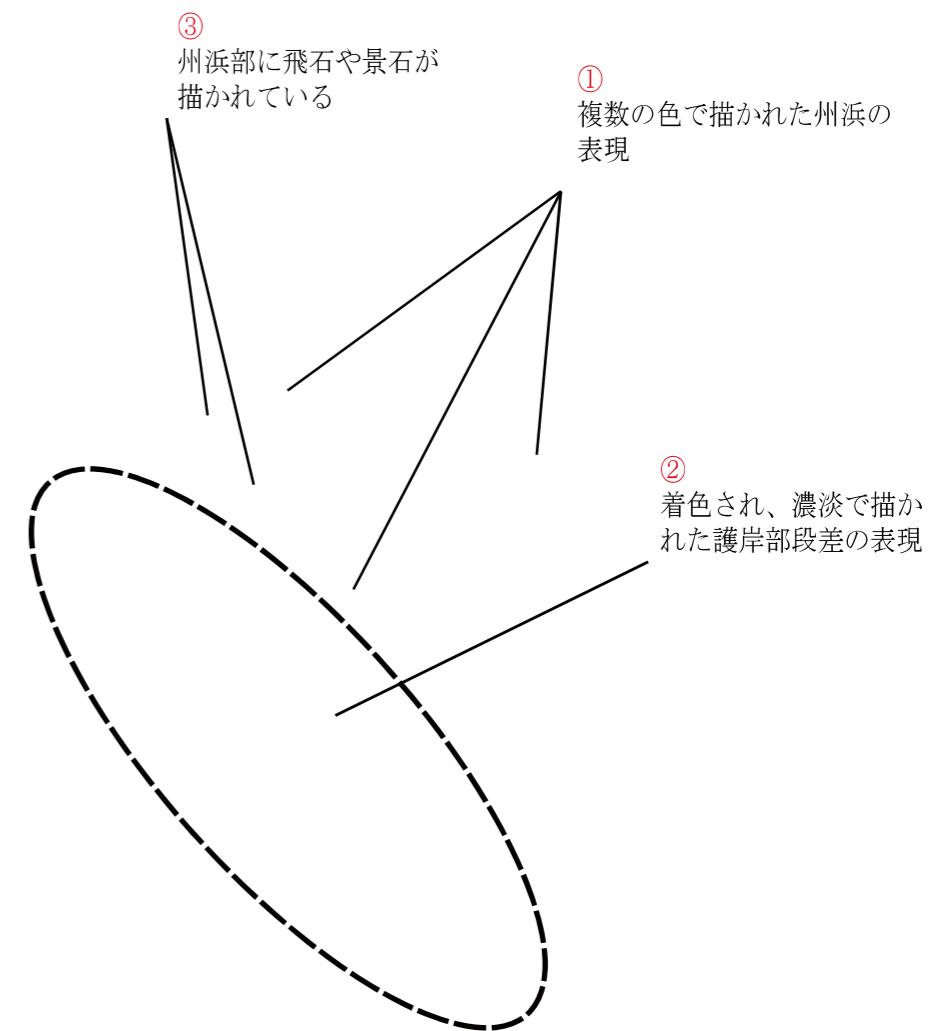


図 3-2 州浜 『尾二ノ丸御庭之図』部分（徳川美術館所蔵）

(2) 発掘調査結果と絵図との比較

『御城御庭絵図』と発掘調査結果を比較し、州浜に関する検証結果を下表のようにまとめた。その結果、護岸が階段状である等違いはあるが絵図は庭園の実態概ね反映しているものと考えた。

表3-2 州浜における『御城御庭絵図』と発掘調査結果との比較検証結果

事項	州浜
絵図	<ul style="list-style-type: none"> 飛石や石組が含まれ、タタキ護岸1段 護岸の3石の間で形成
検出遺構	<ul style="list-style-type: none"> 石材と階段状のタタキ護岸2段 傾斜部に円礫が敷き詰められている 護岸の3石の間で形成 (うち2石は抜き取り痕)

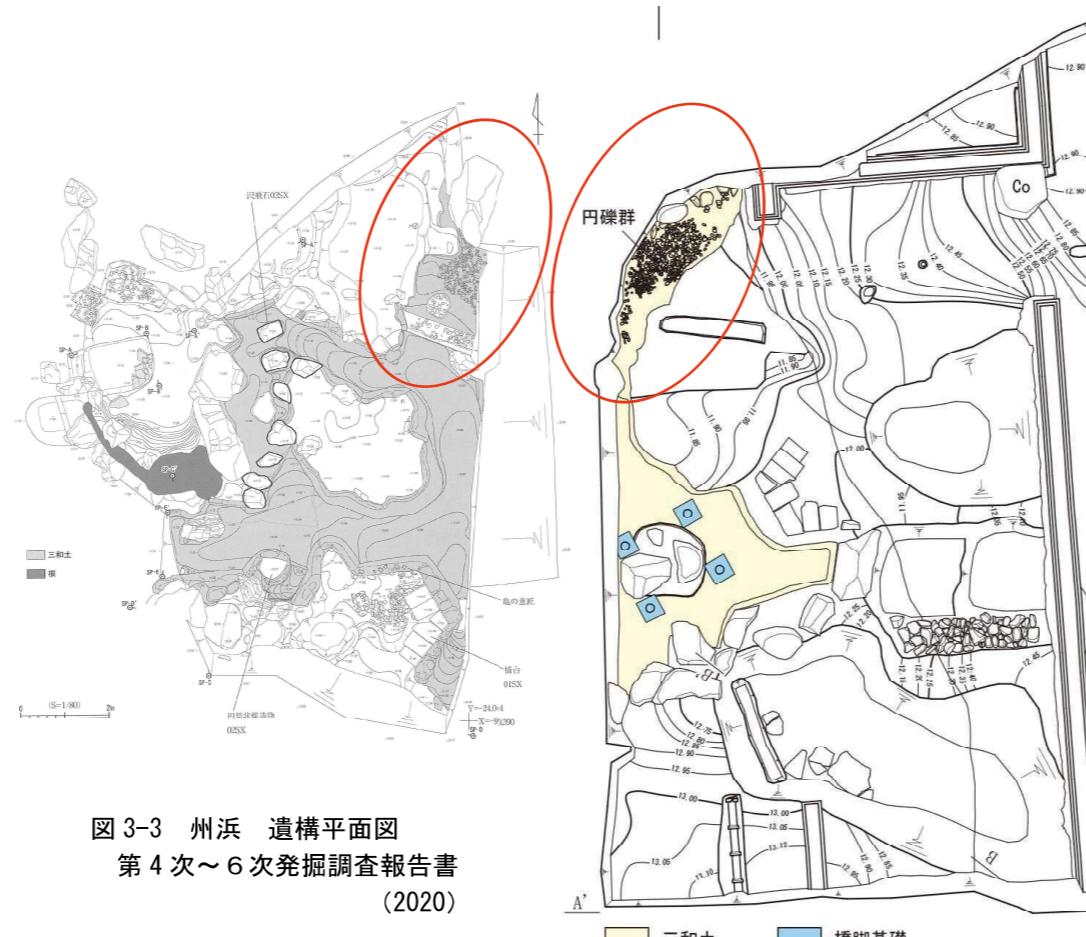


図3-3 州浜 遺構平面図
第4次～6次発掘調査報告書
(2020)

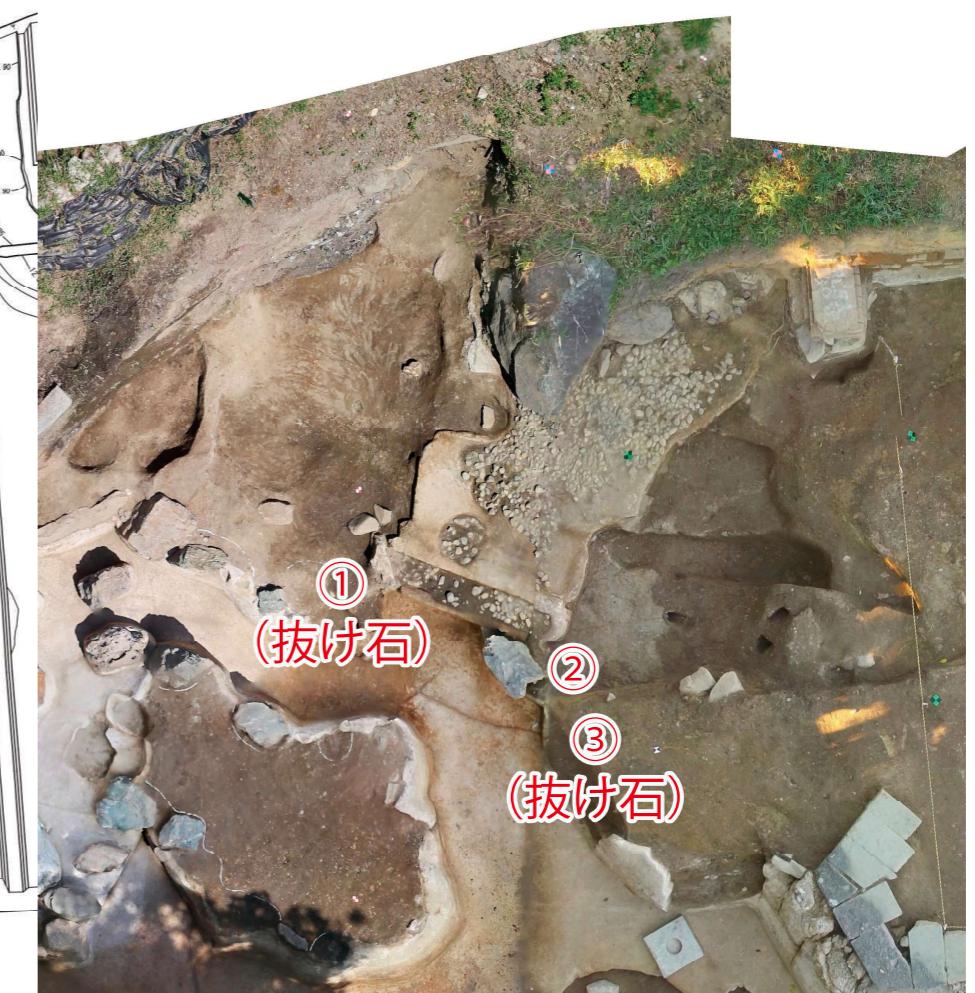


図3-5 州浜石 オルソ画像（合成・部分）

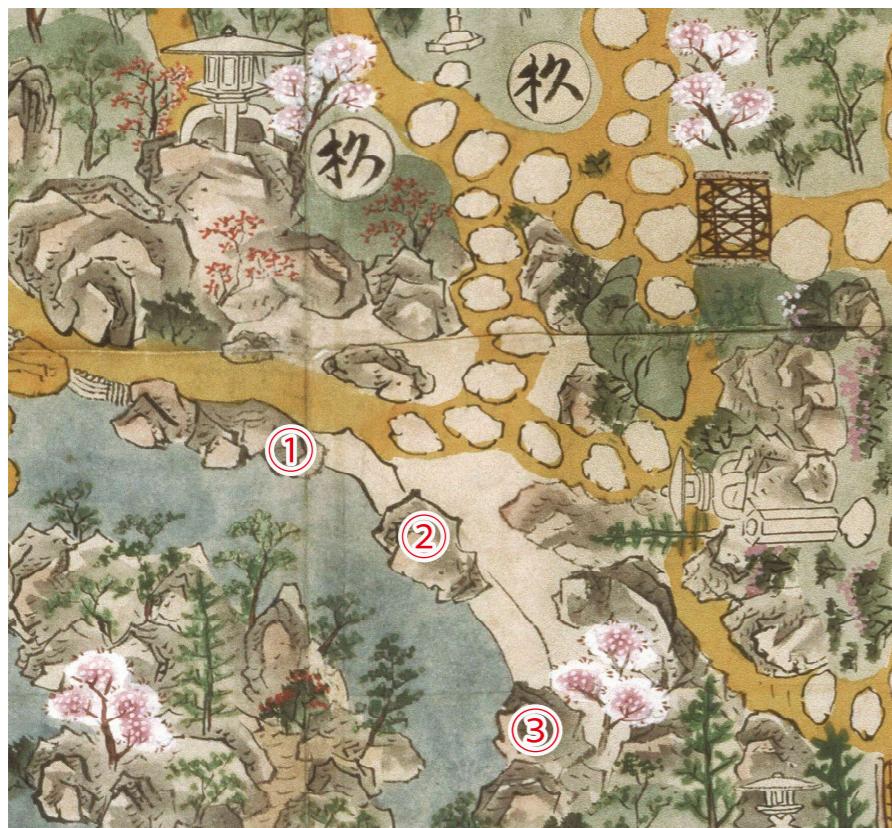


図3-6 州浜 『御城御庭絵図』部分（名古屋市蓬左文庫所蔵）



写真3-1 北園池東側の州浜
(発掘調査後東側より撮影)



写真3-2 北園池東側の州浜
(発掘調査後南側より撮影)

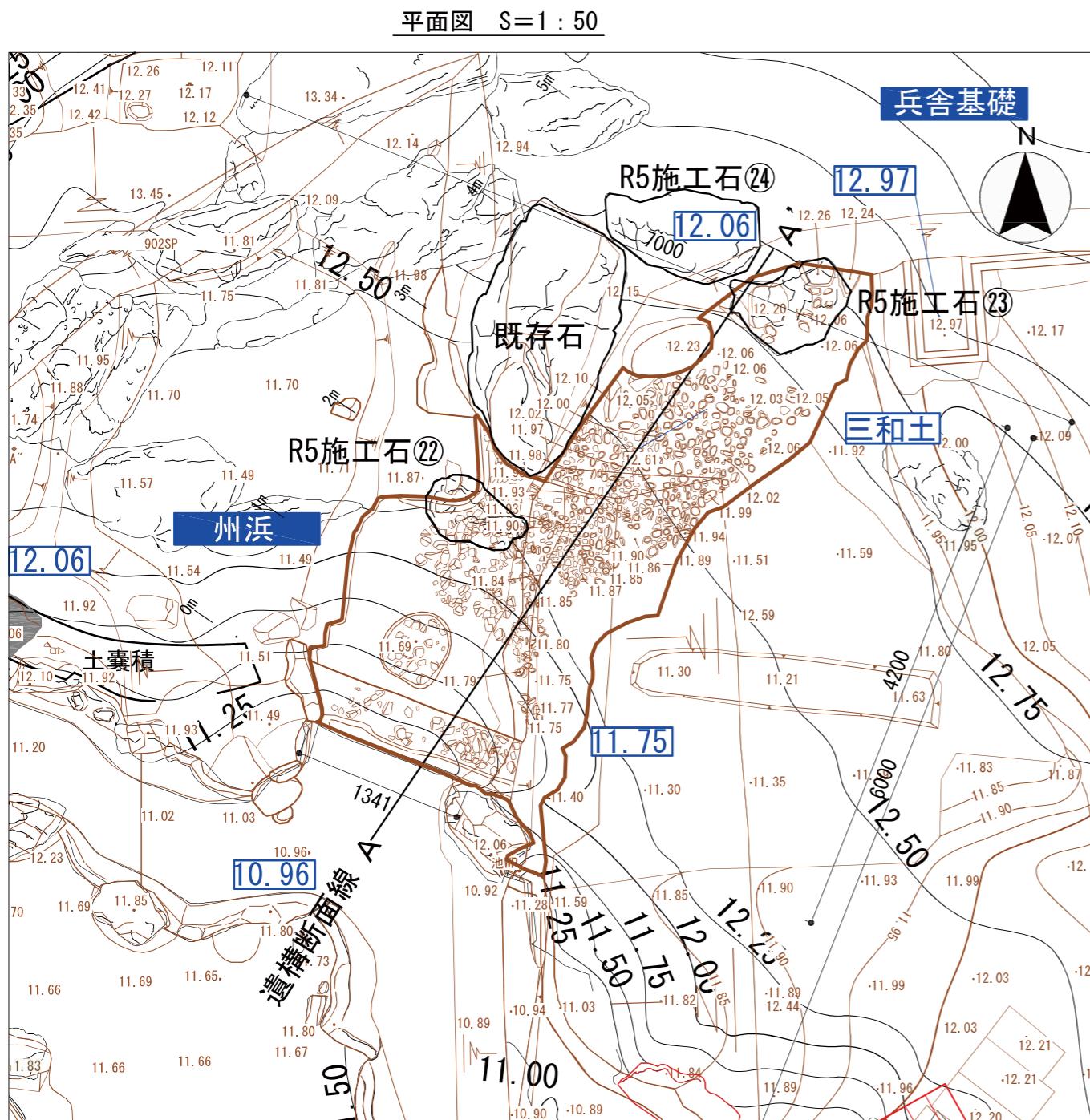
(3) 州浜の構造検討

ア 現況

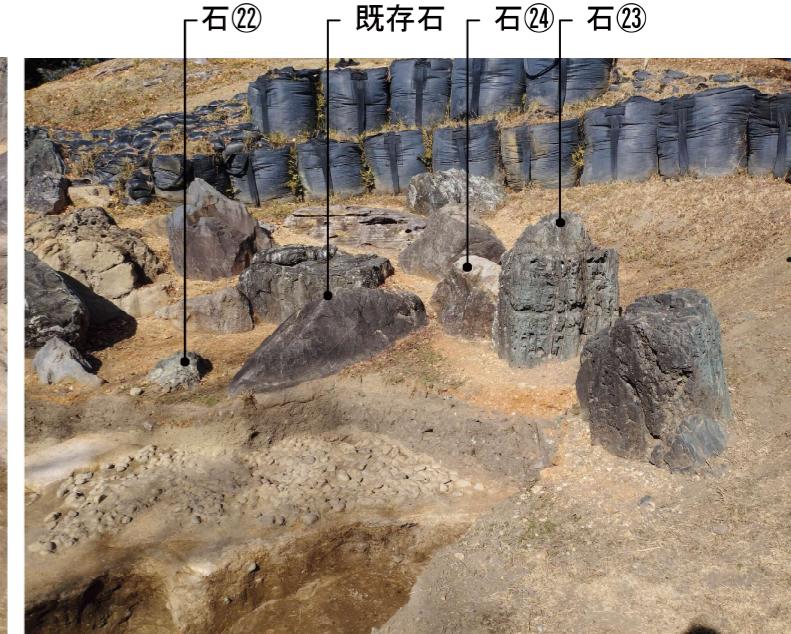
- ・州浜は権現山の裾に位置し、州浜検出遺構近傍に石組が復元されている（令和5年度施工済）。
- ・遺構が検出されたタタキ護岸部は露出保存されている。
- ・遺構が検出されたタタキ礫敷き部は保護層を設けて保存されており、既存石は保護層の上に設置されている。
- ・州浜際の護岸石2石が取り外されている。

イ 検証するべき課題

- ・タタキ1段目と2段目の間の槽について、水生植物の水鉢の痕跡か、枯滝の痕跡か検証する必要がある。



州浜遺構写真（東側より）（2025.01.28撮影）



州浜遺構写真（東側より）（2025.01.28撮影）



州浜遺構写真（南側より）



州浜遺構写真（西側より）（2025.01.28撮影）



州浜遺構写真（南側より）（2025.01.28撮影）



州浜遺構写真（南東側より）（2025.01.28撮影）

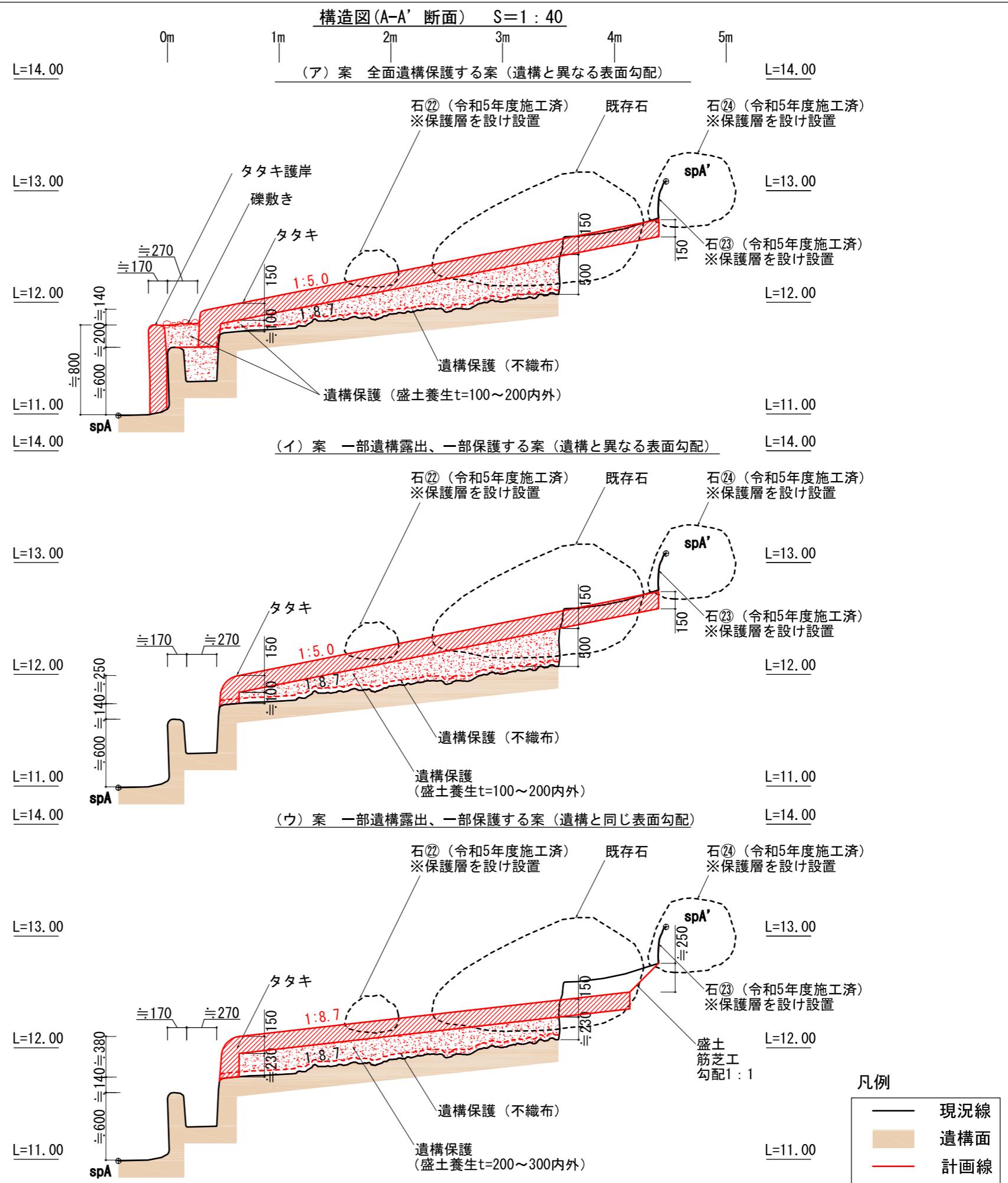
ウ 修理方針

タタキ礫敷き部は、保護層を設け、絵図に描かれているタタキ面を復元する。タタキ表面勾配について、(ア)案と(イ)案は、周辺の景石等の現状地盤面にすりつける必要があるため、遺構のタタキ勾配と異なる設定とする。(ウ)案は、タタキ表面勾配を遺構の表面勾配と同じ設定とし、1:1の盛土と筋芝工により周辺の景石等の現状地盤面にすりつける。

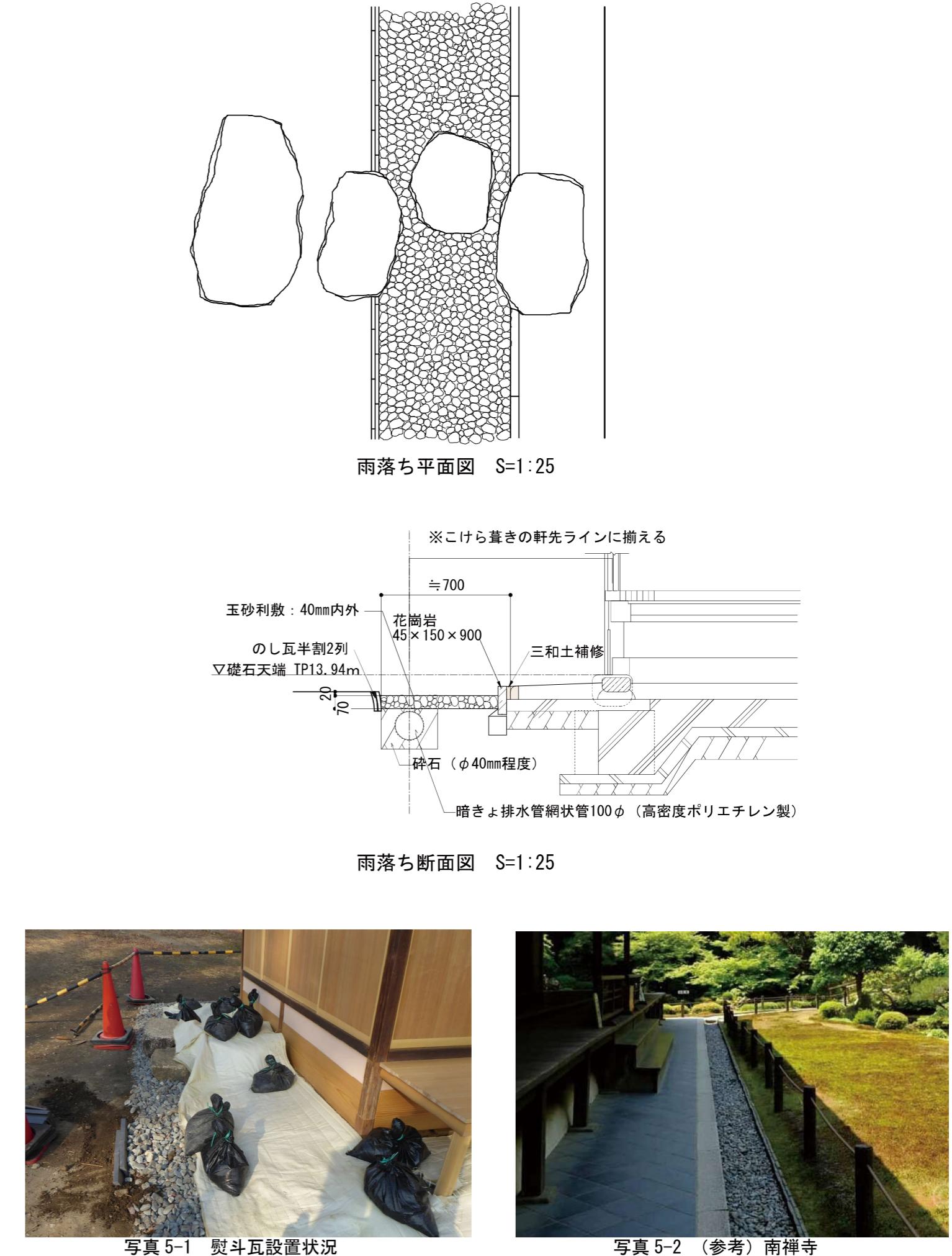
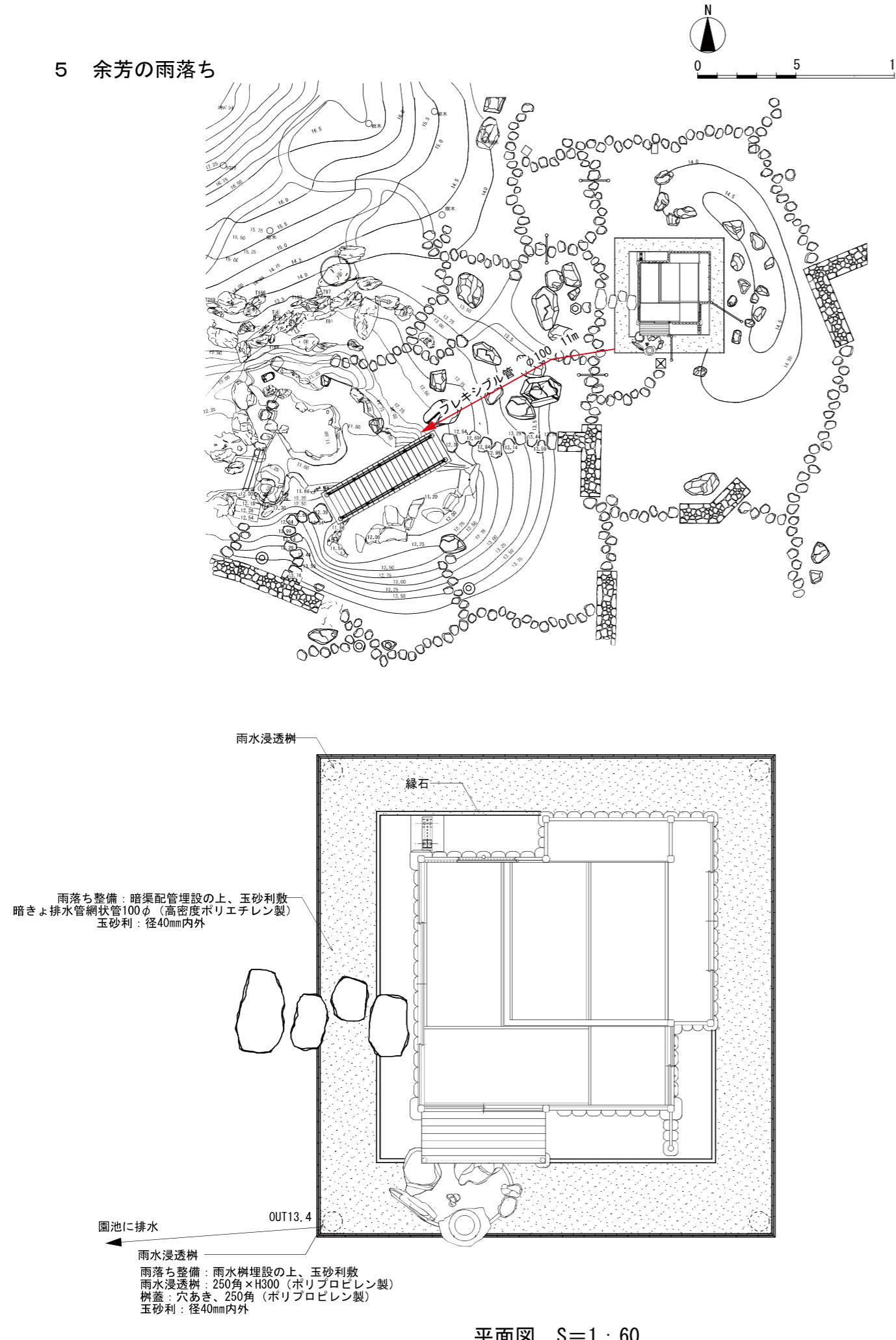
- (ア)案：遺構を全面保護する案
(遺構と異なる表面勾配)
- (イ)案：遺構の一部を露出、一部を保護する案
(遺構と異なる表面勾配)
- (ウ)案：遺構の一部を露出、一部保護する案
(遺構と同じ表面勾配)

エ 修理方法

- ・タタキ護岸部及びタタキ礫敷き部は、遺構面に不織布を敷き、保護盛土($t=100\sim 200$)で養生した上にタタキにて版築により締固めを行う($t=150$)。
- ・タタキの配合は、真砂土1m³当たり石灰120kgと塩化マグネシウム10~20kg混合を標準とする。



5 余芳の雨落ち



6 余芳周辺の春日燈籠について

(1) 概要

余芳周辺には、枝折戸の内側において余芳の北側と南東側の二か所に春日形燈籠が確認できる。以下に「御城御庭絵図」と「尾二之丸御庭之図」を示す。

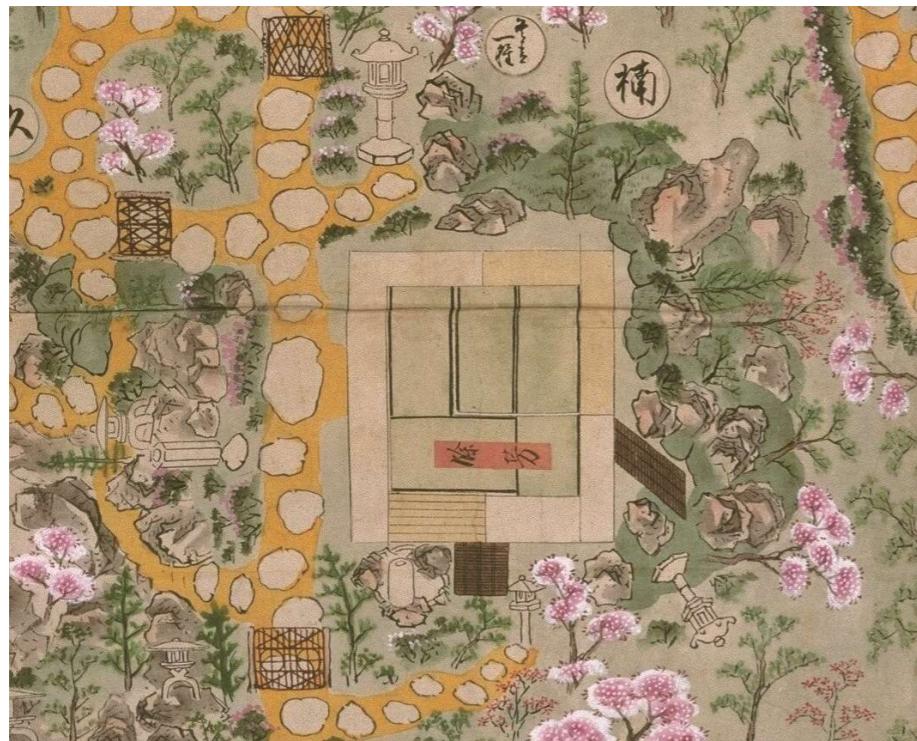


図 6-1 春日燈籠「御城御庭絵図」部分

図 6-2 春日燈籠「尾二ノ丸御庭之図」部分

(2) 余芳南東の春日燈籠（春日燈籠-1）について

「御城御庭絵図」と「尾二之丸御庭之図」を比較し、春日燈籠-1の検証結果を下表にまとめると、概ね同様の形で設置箇所も同様な描き方をされている。

また、絵図に描かれている他の春日燈籠と比較すると、構造を詳細に描き分けられていることが分かる。

表 6-1 春日燈籠における御城御庭絵図と尾二ノ丸御庭之図との検証結果

項目	部位	御城御庭絵図	尾二ノ丸御庭之図
春日燈籠	宝珠	球状で先が尖った表現	球状で先が尖った表現
	笠	六角形で全体にムクリがついた表現	全体にムクリがついた表現。六角形かどうかは不鮮明
	火袋	六角形の表現。正面から三面見え、正面側の火口は縦長の長方形。側面の火口は描かれていな	六角形の表現。正面から三面見え、火口は縦長の長方形。御城御庭絵図と比べて縦に長く描かれている。
	中台	六角形の表現。柱に載っている部分の形状が鮮明に描かれている。	御城御庭絵図と概ね同様の表現であるが、不鮮明である。
	脚	円柱形の柱であり、中央に節がある。	円柱形の柱であり、中央に節がある。御城御庭絵図と比べて細長く描かれている。
	基礎	六角形で基礎の中央部が盛り上がっている表現。	基礎の中央部が盛り上がり上げている表現。二段に描かれている。六角形かどうかは不鮮明。



図 6-3 春日燈籠「御城御庭絵図」部分

図 6-4 春日燈籠「尾二ノ丸御庭之図」部分

(2) 余芳北側の春日燈籠（春日燈籠-2）について

「御城御庭絵図」と「尾二之丸御庭之図」を比較し、春日燈籠-2 の検証結果を下表にまとめると、概ね同様の形で設置箇所も同様な描き方をされている。

また、絵図に描かれている他の春日燈籠と比較すると、構造を詳細に書き分けられていることが分かる。

表 6-2 春日燈籠における御城御庭絵図と尾二ノ丸御庭之図との検証結果

事項	部位	御城御庭絵図	尾二ノ丸御庭之図
春日燈籠	宝珠	球状で先が尖った表現	球状で先が尖った表現
	笠	全体にムクリがついた表現。六角形かどうかは不鮮明	全体にムクリがついた表現。六角形かどうかは不鮮明
	火袋	六角形の表現。正面から三面見え、正面側の火口は縦長の長方形。側面の火口は描かれていな	六角形の表現。正面から三面見え、火口は縦長の長方形として描かれている。
	中台	円形の表現。柱に載っている部分の形状が鮮明に描かれてい	御城御庭絵図と概ね同様の表現である。
	脚	円柱形の柱であり、中央に節がある。	円柱形の柱であり、中央に節がある。
	基礎	六角形で基礎の中央部が盛り上がっている表現。	基礎の中央部が盛り上がり上げている表現。二段に描かれている。六角形かどうかは不明。

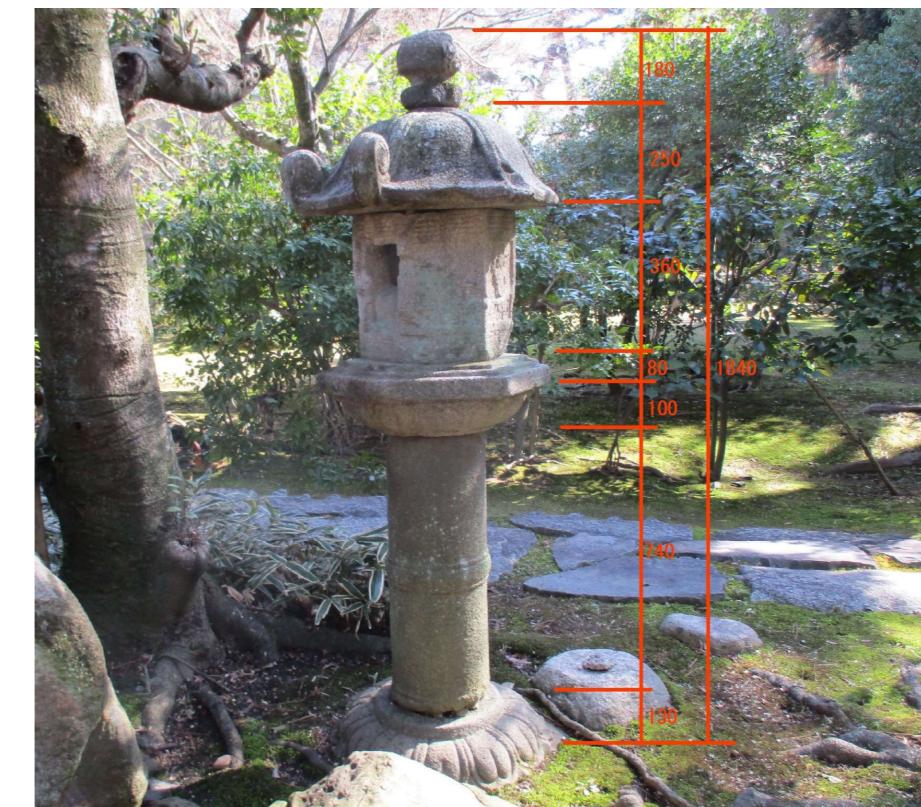
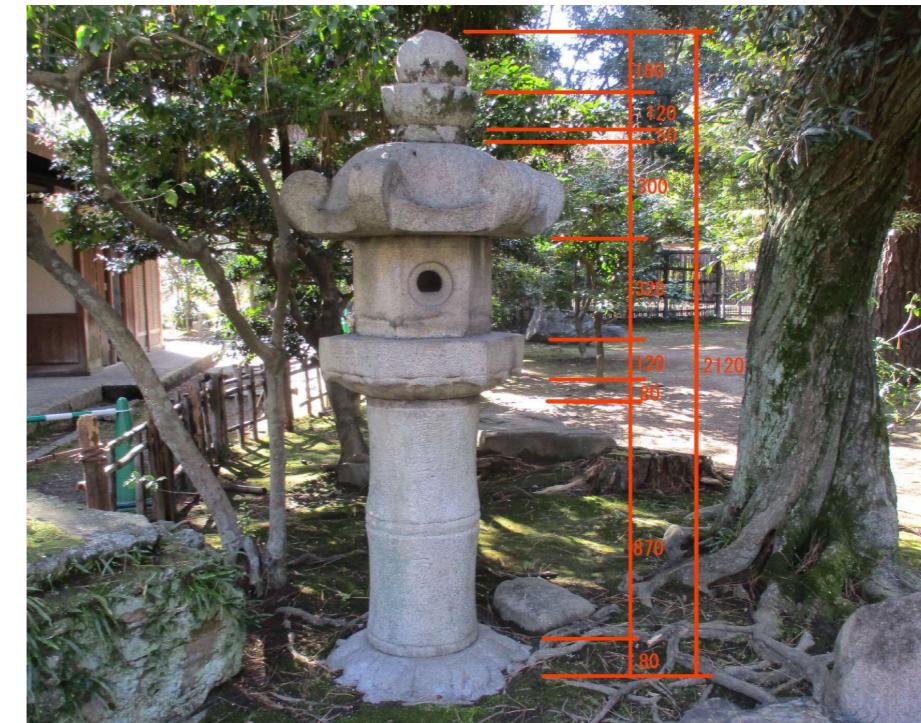


図 6-5 春日燈籠「御城御庭絵図」部分

図 6-6 春日燈籠「尾二ノ丸御庭之図」部分

(3) 名古屋城内の春日燈籠について

名古屋城内には、猿面茶席の周辺に春日燈籠が 2 基あるため、これらの寸法等を参考に復元を行いたい。



樹木管理平面図 縮尺1/250(A1)

名勝内における剪定等の方針

下図に示す樹木の除伐等を行う他、以下の剪定方針で庭園の修復剪定を実施する。

- ・権現山東側(H26年度補植)は整枝剪定を行う。
- ・マツ、モミジ、ケヤキ等は中間層の樹木が見通せるように枝抜き剪定を行う
- ・中間層を成すモッコク、イヌマキは、見通せるように整枝剪定を行う。
- ・ツツジ、サツ等の低木類は、枝割りを行い高さを低くする。





二之丸庭園第12次発掘調査成果について

1. 調査区設定の主な目的

名勝名古屋城二之丸庭園の修復整備に伴い、現在進行中の北池修理にて必要な情報を取得するため。

2. 調査区について(図2)

(1) 調査区 1

面積 : 15 m²

目的 : 磯敷下に位置するタタキにあけられた穴(以下、タタキ坑)(飛石抜き取り痕か?)の確認、磯敷構築時期の確認

調査結果 : 磯敷は約3×2mの規模で広がる遺構で、含まれていた遺物(レンガ、ガラスなどの近代遺物)の存在から近代に構築された遺構であることが明らかになった。二之丸においてレンガを使用した大規模な建物は明治7年(1874)ごろであるため、明治7年以降に構築され、兵舎構築による造成で埋没(『陸軍大日記』の記述から明治15年(1882)ごろ)したと考えられる。

SX1は約2×0.3mの長方形の構造物である。壁面と底部はタタキで施工されている。内部は黄褐色粘土、黒褐色粘質土、磯敷由来の暗褐色粘質土及び磯の順に堆積していた。磯敷由来の暗褐色粘質土及び磯以外は全体に広がらず、部分的に堆積してい

た。池側(南側)壁面南西角と権現山側(北側)壁面北西角に切れ込みが確認できた。底部及び壁面をタタキで構築していることから水槽のような機能が想定できる。北側のタタキ面構築時にSK1も構築され、磯敷き構築以前に廃絶したと考えられる。

SK(土坑)2は直径約0.5m、SK3は直径約0.3mの円形のタタキ坑である。底部はSX1とは異なりタタキ面のベースとなる盛土である。形状から飛石の抜き取り痕と考えられる。周囲のタタキに打ち割られた形跡が確認できないため、タタキ坑は施工時の形状を保っていると考えられる。タタキ坑の堆積土及び磯は磯敷に由来するため、磯敷構築以前に飛石を取り外し廃絶していた。

タタキ面aは約2×2mの規模で検出したタタキ面である。検出高は標高11.33mである(現タタキ面は標高11.77~12.30m)。厚さは1~15cmで南端で現北池に掘り込まれている。タタキ面aは現在地表に露出しているタタキの下層から検出しているため、古い構築である。また、現在地表に露出しているタタキと比較し薄く、脆い。表面に凹凸が目立つ為、上面は削平されている可能性がある。

(2) 調査区2

面積 : 8.5 m²

目的 : 敷石A(橋台)の時期比定、橋(礎石)の時期比定、池底タタキ下の土の堆積状況の確認

調査結果 : 敷石Bは現在地表に露出している敷石Aの下から確認した。敷石Aと同様に上面が平坦で、水平に据えられている。敷石B上に置かれている磯やタタキは敷石A設置の際に角度を調整するためのものと考えられる。

タタキ面bは敷石Bと同じレベルで確認した。調査区1タタキ面aと比較すると硬質で、色調は褐色で現北池の護岸及び池底タタキに類似している。敷石Bと同様に上面に磯が置かれており、敷石A設置の際に角度を調整するためのものと考えられる。タタキ面bと敷石Bは同じ覆土が堆積しているため、同時期に廃絶したと考えられ、その後敷石Aが施工された。タタキ面bと敷石Bのベースとなる土は確認できていないがレベルから両遺構は同時期に機能していたと考えられる。

SK4は直径約1.5mのタタキ坑である。深さは約50cmで内部は土が堆積している。壁面から池底タタキのベースとなる盛土(7層)を確認することができた。SK2やSK3と比較すると輪郭に角があり、形状もいびつであるため、池底施工後に打ち割られた可能性がある。SK4内に石A~Cが位置している。堆積状況から石A及び石BはSK4構築後に入れられたと考えられるが、石Cの設置時期は明らかにできなかった。

SK4の周囲には4石の礎石が確認できる。礎石の底面は池底タタキ底よりも下に位置しており、7層上に据えられている。礎石、池底タタキ、SK4の順に構築された。

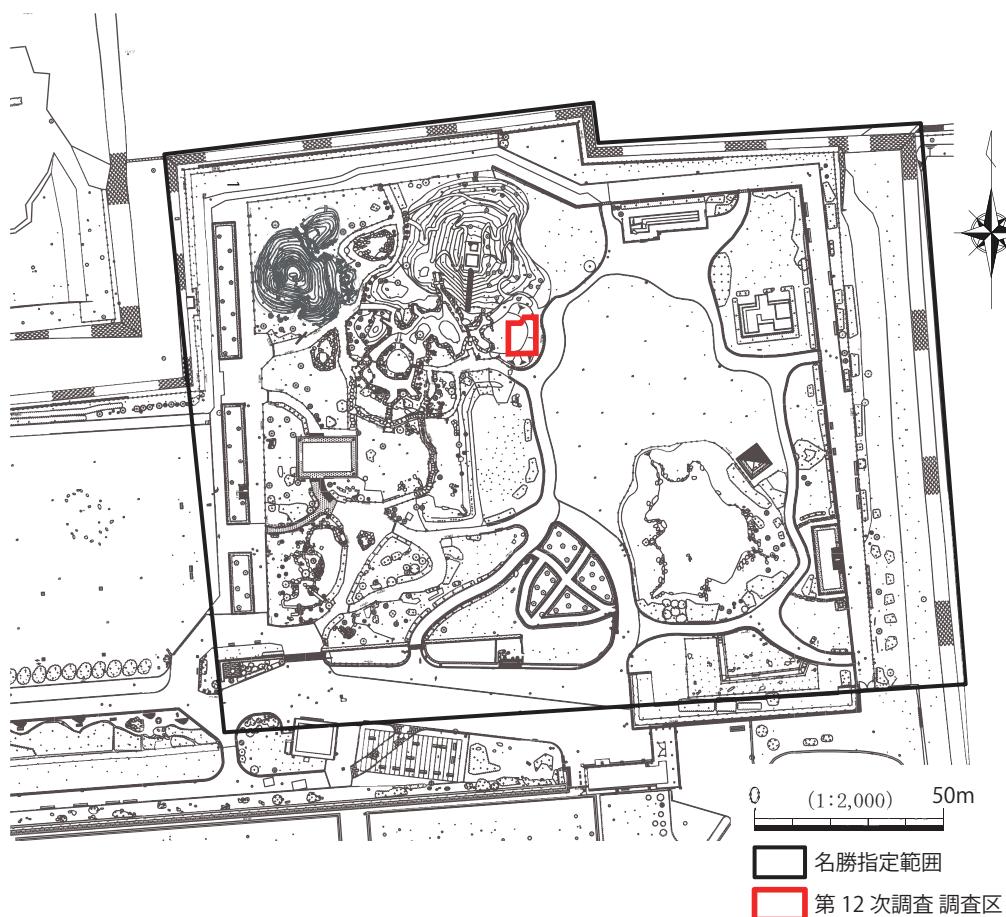


図1 名勝名古屋城二之丸庭園 発掘調査位置図

SK2(西から) 赤線は飛石据付け想定面



SK3(西から) 赤線は飛石据付け想定面



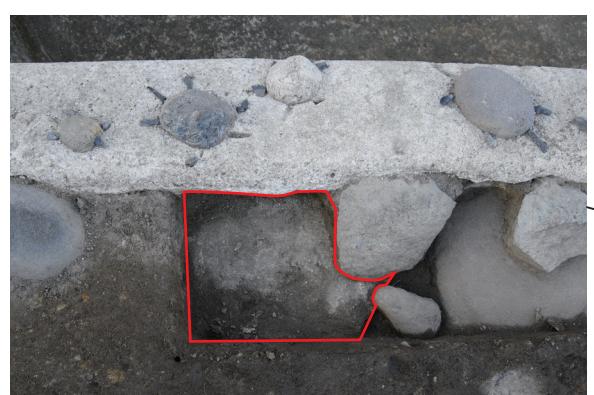
礫敷(西から)



SX1(南から)



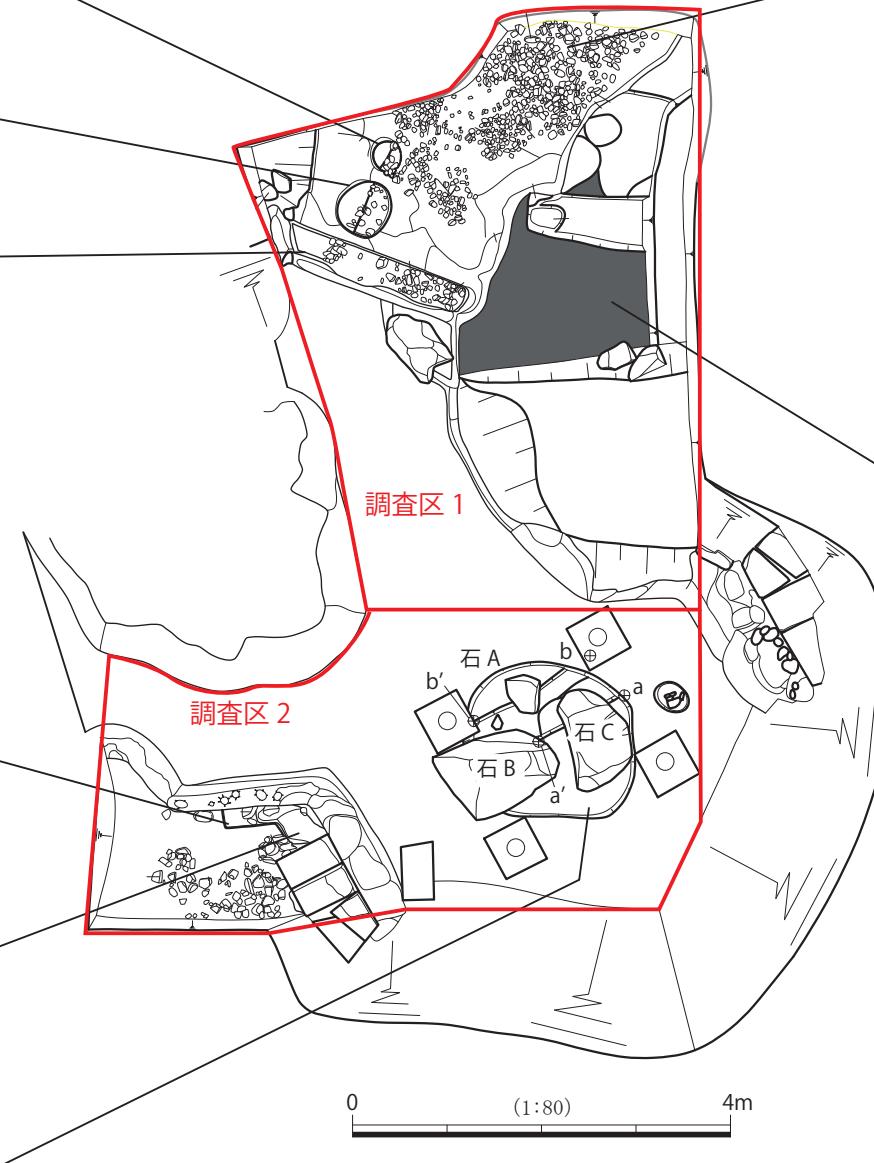
タタキ面 b(南から) ※赤枠



敷石 B(西から) ※赤枠



SK4(北から)



- 1 にぶい黄褐色粘質土 レンガ片含む 近代以降の堆積
- 2 灰褐色粘質土
- 3 暗褐色粘質土
- 4 暗褐色粘質土 石B設置以前の堆積
- 5 黒褐色粘質土
- 6 にぶい黄褐色粘質土
- 7 にぶい黄褐色粘質土 地山由来のブロック土含む SK4構築以前の堆積

